上野城跡（第15次）発掘調査報告

（藤堂玄蕃屋敷跡）

― 伊賀市上野丸之内 ―

２０２３（令和５）年３月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1．本書は、三重県伊賀市上野丸之内に所在する上野城跡の第15次発掘調査にかかる報告書である。

2．本遺跡の調査は津地家裁伊賀支部庁舎建築工事に伴い、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局から依頼を受けて実施した。現地調査から報告書作成に至る経費は、国土交通省任が負担した。

3．発掘調査期間は、令和3年10月11日から令和4年2月7日までである。

4．発掘調査面積は873㎡である。

5．発掘調査および整理作業体制は、次のとおりである。

［発掘調査］

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課

主査　佐藤嘉晃　　技師　樋口太地

発掘調査業務委託　　橋本技術株式会社

［整理作業］

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課　佐藤、樋口

蛍光Ｘ線分析　三重県総合博物館　調査・資料情報課　主任　甲斐由香里

6．現地での図面作成及び写真撮影は調査担当者により、遺物写真撮影は樋口、佐藤が行った。

7．本書の編集は樋口があたり、文責は文末に示した。

8．調査にあたっては、下記の諸氏や機関に御指導・ご協力を賜った。記して感謝したい。

（敬称略、順不同）

伊賀市教育委員会　笠井賢治、眞名井孝政　滋賀県立大学前教授　濱崎一志

9．調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　例

1．本書では、国土地理院発行の1：25,000数値地図（「上野」相当、平成20年10月発行）および遺跡地形図において、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得た三重県共有デジタル図を用いている。（令和４年４月４日三総合地第１号）。

2．標高は、東京湾平均海水面を基準とした。

3．本書で用いた座標は世界測地系による座標北である。方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。

4．本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
SE：井戸　SK：土坑　SD:溝・自然流路　SZ：不明遺構　Pit:柱穴

5．土層及び土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、2005年版）に拠った。

6．遺物実測図の縮尺は１：４を基本とし、遺物によってはその他の縮尺を適宜用いた。縮尺は各図版にキャプション及びスケールにて示している。

7．註は原則として各章の文末に付し、参考文献も註に記した。

8．遺構一覧表、遺物観察表は各章末に付した。

9．遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
- 報告No.は、遺物図版及び写真図版中で各遺物に付した番号と対応している。
- 実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
- 色調は標準土色帖の色名に拠る。
- 土器および陶磁器類の残存率は口縁部の全周を12分割して示す（例3/12）。口縁部が遺存していないものについては、底部等の残存率を示した。また、1/12以下のものは「小片」等としている。
- 計測値は完存ないし復元の値である。口径・底径は実測時の接地面で計測した値とした。

10. 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告No.と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

11. 近世の土器・陶磁器の分類・編年と暦年代観は特に断りのない限りは以下の文献に従う。
- 肥前系陶磁器　九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000年。
- 京焼　角谷江津子「同志社校他出土の京焼とその変遷」『同支社大学歴史資料館館報』第２号 同志社大学歴史資料館 1999年。
- 信楽焼　畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 2003年。
- 瀬戸・美濃系陶器　瀬戸市『瀬戸市史』陶磁史篇６　1998年。

目　次

Ⅰ　前言 …… 1
　1　調査の経緯と経過
　2　発掘調査の方法

Ⅱ　位置と環境 …… 5
　1　地理的環境
　2　歴史的環境
　3　上野城と城下町

Ⅲ　遺構 …… 9
　1　基本層序と微地形
　2　遺構の詳細

Ⅳ　遺物 …… 22
　1　遺物の概要
　2　遺物の詳細

Ⅴ　総括 …… 57
　1　藤堂玄蕃屋敷と遺構の関係
　2　出土遺物の検討
　3　墨書陶磁器の検討
　4　調査成果と今後の課題

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図……2
第２図　調査区配置図……3
第３図　遺跡分布図……4
第４図　Ａ区遺構全体図……10
第５図　Ｂ区遺構全体図……11
第６図　Ａ・Ｂ区土層断面図……12
第７図　ＳＥ16平面図・土層断面図……13
第８図　ＳＫ１検出時平面図・土層断面図……15
第９図　ＳＫ１床面平面図……16
第10図　ＳＫ12平面図・土層断面図……17
第11図　ＳＫ18・19・23平面図・土層断面図……18
第12図　ＳＫ24・25・27平面図・土層断面図……19
第13図　ＳＺ８・10平面図・土層断面図……20
第14図　ＳＥ16・ＳＫ１出土遺物……23
第15図　ＳＫ１出土遺物……24
第16図　ＳＫ１・ＳＫ12出土遺物……25
第17図　ＳＫ12出土遺物……26
第18図　ＳＫ・ＳＤ・ＳＺ出土遺物……27
第19図　ＳＫ24出土遺物①……29
第20図　ＳＫ24出土遺物②……30
第21図　ＳＫ24出土遺物③……31
第22図　ＳＫ24出土遺物④……32

第23図　ＳＫ24出土遺物⑤……33
第24図　ＳＫ24出土遺物⑥……34
第25図　ＳＫ24出土遺物⑦……35
第26図　ＳＫ24出土遺物⑧……36
第27図　ＳＫ24出土遺物⑨……37
第28図　ＳＫ25出土遺物①……38
第29図　ＳＫ25出土遺物②……39
第30図　ＳＫ25出土遺物③……40
第31図　ＳＫ25出土遺物④……41
第32図　ＳＫ25出土遺物⑤……42
第33図　ＳＫ25・26・27出土遺物……43
第34図　包含層・表土出土遺物……45
第35図　絵図からみた藤堂玄蕃屋敷と検出遺構の位置関係……58

表　目　次

第１表　上野城跡関連遺跡の調査歴一覧表……８
第２表　遺構一覧表……21
第３表　遺物観察表①……47
第４表　遺物観察表②……48
第５表　遺物観察表③……49
第６表　遺物観察表④……50
第７表　遺物観察表⑤……51
第８表　遺物観察表⑥……52
第９表　遺物観察表⑦……53
第10表　遺物観察表⑧……54
第11表　遺物観察表⑨（瓦）……55
第12表　遺物観察表⑩（その他）……56
第13表　蛍光Ｘ線分析結果……56
第14表　墨書土器・陶磁器一覧表……60

写　真　図　版

写真図版１　Ａ区全景、北壁土層、西壁土層
写真図版２　Ｂ区全景、東壁土層、北壁土層
写真図版３　ＳＫ１
写真図版４　ＳＫ１遺物出土状況、埋甕出土状況
写真図版５　ＳＫ12、北半土層、木杭出土状況、遺物出土状況
写真図版６　ＳＫ18・19・23、ＳＥ16
写真図版７　ＳＫ24・25・27
写真図版８　ＳＺ８・９
写真図版９　ＳＺ10（Ａ区側）、土層断面
写真図版10　ＳＺ10（Ｂ区側）、作業風景
写真図版11　出土遺物①
写真図版12　出土遺物②
写真図版13　出土遺物③
写真図版14　出土遺物④
写真図版15　出土遺物⑤
写真図版16　出土遺物⑥
写真図版17　出土遺物⑦
写真図版18　出土遺物⑧
写真図版19　出土遺物⑨
写真図版20　出土遺物⑩
写真図版21　出土遺物⑪
写真図版22　出土遺物⑫
写真図版23　出土遺物⑬
写真図版24　出土遺物⑭
写真図版25　出土遺物⑮
写真図版26　出土遺物⑯
写真図版27　出土遺物⑰
写真図版28　出土遺物⑱
写真図版29　出土遺物⑲
写真図版30　出土遺物⑳
写真図版31　出土遺物㉑

Ⅰ 前 言

1 調査の経緯と経過

（1）調査に至る経緯

伊賀市の中心市街地は、近世の上野城下町を基礎として成立しており、周知の埋蔵文化財包蔵地である。この地域内において、津地家裁伊賀支部庁舎建築工事が計画されたため（第１図）、調査原因者の最高裁判所から執行委任を受けて設計工事することとなった国土交通省中部地方整備局営繕課と当該地域の遺跡に関する保護措置を協議した。

上野城の絵図と現地形の照合により、当該範囲は藤堂藩上級家臣の藤堂玄蕃屋敷に位置することがわかった。これを受け、令和元年度には仮庁舎建設範囲の工事立会および新庁舎建設範囲の範囲確認調査を実施した。

範囲確認調査では８箇所を対象に調査坑を設定した。調査では土坑、溝、ピットなどを検出し、陶磁器や瓦などの近世の遺物が出土した。調査の結果、近世の遺構が良好に残存していることが確認され、40㎝を超えて掘削を行う場合は調査が必要であることがわかり、新庁舎建設予定地のほぼ全域にあたる873㎡を調査対象とすることとなった。

（2）調査の経過

調査対象地を２箇所に分け、西側調査区はＡ区（673.3㎡）、東側調査区はＢ区（199.7㎡）とし、全体で873㎡の調査を行った（第２図）。調査はＡ区から開始し、排土置き場の制約からＡ区は令和３年10月11日～12月17日、Ｂ区は12月23日～令和４年１月20日の期間に分けて調査を行った。
調査の経過に関しては以下の通りである。

2021年（令和3年）

10月28日　Ａ区表土掘削開始。
11月５日　Ａ区包含層の掘削開始。
11月15日　ＳＫ１検出。
11月16日　ＳＫ２～４、ＳＤ５・６を検出。
11月17日　ＳＥ７を検出。
11月19日　ＳＺ10を検出
11月24日　ＳＫ12を検出。ＳＤ11・13・14を検出。
11月30日　ＳＥ16を検出。
12月３日　Ａ区全景写真撮影。
　　ＳＫ18を検出。
12月６日　ＳＫ19・20を検出。
12月14日　ＳＺ22・23検出。
12月15日　Ａ区埋め戻し開始。
12月23日　Ｂ区表土掘削開始。
12月24日　ＳＫ24～27を検出。

2022年（令和４年）

１月７日　ＳＫ28を検出。
１月11日　ＳＺ10の続きを検出。
１月13日　Ｂ区全景写真撮影。
１月18日　Ｂ区埋め戻し開始。
１月20日　撤収完了。

（3）文化財保護法にかかる諸手続

①県埋蔵文化財保護条例第48条第１項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（県教育長あて国土交通省中部地方整備局長通知）
　令和３年２月15日付　国部整計第220号

②文化財保護法第99条第１項（県教育委員会教育長あて埋蔵文化財センター所長通知）
　令和３年10月29日付　教埋第204号

③文化財保護法第100条第２項「埋蔵文化財の発見・認定について」（伊賀警察署長あて県教育委員会委員長通知）
　令和４年３月14日付　教委第12－4420号

（4）普及公開

発掘成果報告会を伊賀市との共催により計画したが、新型コロナウイルス感染状況の拡大にともない、中止を余儀なくされた。これに替わり、発掘成果の紹介を「リモート発掘調査成果報告会」としてYouTubeに動画を公開している。

2　発掘調査の方法

(1)地区設定

調査区内の地区割は世界測地系を採用し、4m四方の地区設定を行った（第4・5図）。X＝-136,576m、Y＝120,000mを原点に、西から東へ1～11、北から南へA～Iとして、北西隅が起点となる地区名（例：A1）を与えた。

(2)遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積度は重機（バックホー）で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。なお、井戸や溝、下層確認用サブトレンチの掘削において重機を補助的に用いた。

(3)記録・図化

遺構検出段階でグリット単位の1/40略測図（遺構カード）を作成し、これをもとに1/100の遺構略測図を作成することで、調査区全体の遺構の位置関係を把握した。遺構平面図・土層断面図については1/20の手書き実測で行った。各遺構の詳細な平面図・断面図・立面図は基本的に1/20の手書き実測を行った。

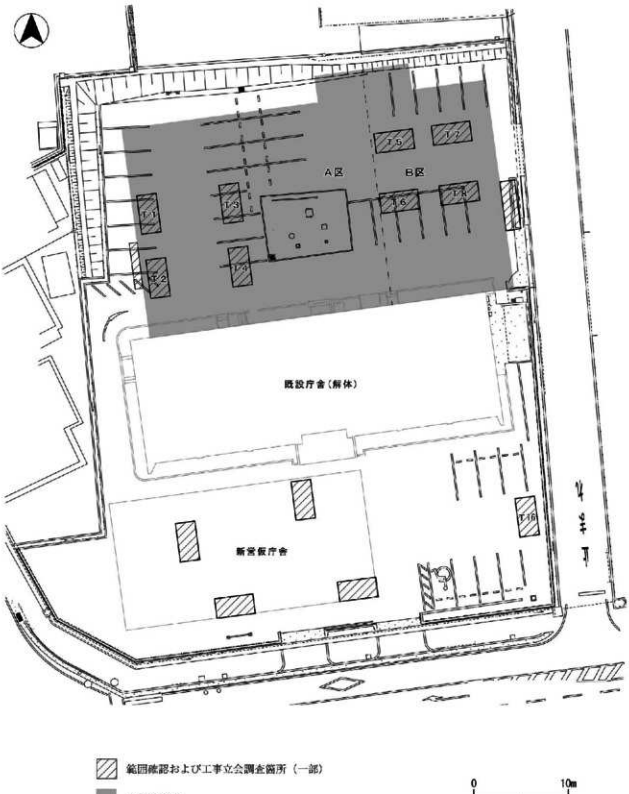
遺跡の調査写真については、調査全景や重要な個別遺構および調査前状況、遺構、土層断面などは撮影した。また、調査前状況や遺構、土層断面などをデジタルカメラで撮影した。使用したカメラはニコンD3300Eである。また、コンパクトデジタルカメラ（オリンパスTG835）での撮影も適宜行った。

なお、これらの図面・撮影画像データ・作業日誌の記録類は当センターで保管している。

(4)出土遺物の管理

出土遺物は遺構のグリット及び出土年月日単位で区分して取り上げている。また、報告書掲載遺物およびその参考資料と未掲載資料に分けて整理を行い、保存している。　（佐藤・樋口）

第1図　調査区位置図(1:2,000)



第２図　調査区配置図(1:400)

1．上野城跡
2．小芝遺跡
3．印代東方遺跡群
4．山ノ川遺跡
5．森脇遺跡
6．山神雲穂神社古墳
7．御墓山古墳
8．外山・鷲棚古墳群
9．勝定塚古墳
10．伊予之丸古墳群
11．伊賀国府跡
12．三田廃寺
13．井戸池遺跡
14．北西遺跡
15．伊賀国分寺跡
16．長楽寺廃寺
17．官舎遺跡
18．古屋敷遺跡
19．安国寺跡
20．上山氏館跡
21．北堀池遺跡
22．浅子谷古墳群
23．御墓山窯跡
24．得意窯跡

第３図　遺跡分布図(1:50,000)

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

上野城跡（1）は、行政上は三重県伊賀市上野丸之内を中心とした地に位置する。伊賀市と名張市を含めたこの地域は「伊賀地域」と呼ばれ、「伊賀盆地」の名からもわかるように、山に囲まれた盆地地形をなしている。

伊賀盆地を流れるのが服部川と木津川である。服部川には上野城跡の北約１kmで柘植川が合流し、服部川も上野城跡の北西約２kmで木津川と合流する。木津川はその後、京都府南部から淀川となり、大阪府を経て大阪湾へ流れ込む。このことから、当地域は淀川水系の上流部に属することがわかる。

上野城跡のある木津川・服部川流域は、伊賀盆地の北部にあたり、有史以前には古琵琶湖が広がっていた地域で、流域各地で約300万年前のゾウなどの足跡化石が確認されている。

上野城跡は、木津川と服部川に挟まれた台地上にあたる（以下、「上野台地」と呼称）。城跡最高所の標高は185mほどあるが、上野市街地の広がる城跡裾部分の標高は145～150mほどである。周辺水田域の標高が135m前後で、その境は比較的急峻な段丘崖となっている。

当遺跡をとりまく諸環境について、既存の調査や資料をもとに概観する（第３図）。

2　歴史的環境

a　古墳時代以前の伊賀北部地域

当地域では古代以前から淀川水系を通じた近畿地方との交流が見られる。代表的な弥生時代遺跡としては、小芝遺跡（2）、印代東方遺跡群（3）、山ノ川遺跡（4）、森脇遺跡（5）などがある。

古墳時代では、前期古墳として三角縁三神二獣鏡の出土で知られる山神寄建神社古墳（6）がある。中期になると、全長約180mの御墓山古墳（7）を筆頭に、外山・鷺棚古墳群（8）などでも前方後円墳が造成される。

古墳時代後期の代表的な古墳に、勘定塚古墳（9）がある。この古墳は損壊著しいが、玄室幅3.6mの巨大な横穴式石室を有している。このように、伊賀北部地域、なかでも柘植川の北岸地域は、古墳時代を通じ、極めて重要な地として認識されていたと考えられる。

この一方、服部川南岸部にあたる上野台地の遺跡展開は、上野城および城下町が広く形成されたことで、詳細はよくわかっていない。上野城跡の北東部には、伊予之丸古墳群（10）がある。５世紀中葉から後半にかけての古墳が複数基あり、中には四禽鏡を伴う古墳があった。この他では、上野城下町遺跡東ノ堅町筋第１～４次調査で円筒埴輪片、上野城下町遺跡農人町調査区で円墳２基が確認されている。これらの状況から、現在では削平されているものの、上野台地上には数多くの古墳・古墳群が存在していたと考えられる。

b　古代の伊賀北部地域

古代の伊賀北部地域は、伊賀国阿閉郡にあたる。この時期の当地を考える上で官道や伊賀国府、駅家などが重要である。五畿七道の制が実施されて以降、伊賀国は東海道に含まれ、畿内に接しているいわばその玄関口にあたる。

「道」としての東海道は、平安時代前期の仁和２(886）年以降は平安京（京都）から近江・鈴鹿峠を経て伊勢北部へと至るルートとなったが、それ以前の東海道（初期東海道）は伊賀北部を経由していた。現在の伊賀市外山地区で確認された伊賀国府跡（11）は、初期東海道の沿線で、それに北接して造成されたと考えられる。初期東海道沿いには、三田廃寺（12）や井戸地遺跡（13）・北門遺跡（14）などの古代集落遺跡・寺院跡が多く確認される。また、伊賀国府跡の南方５kmには伊賀国分寺（15）・国分尼寺（長楽山廃寺（16））がある。

駅家については、『続日本紀』和銅４(711)年１月丁未条に記載されている「伊賀国阿閉郡新家駅」の候補地として官舎遺跡（17）が注目されている。また近年調査をした古屋敷遺跡（18）から官舎遺跡にかけては古道とされる地割が見られ、初期東海道との関係が注目されている。

c　中世の伊賀北部地域

平安時代後期から鎌倉時代にかけての伊賀北部地

城では、各地で荘園が増加する。伊賀といえば東大寺領荘園が著名だが、伊賀北部では興福寺・春日社領を含む摂関家領や六条院領などの院宮王家領が目立つ。平安時代末期には服部川中流域の六条院領平田荘が平氏の拠点となり、平氏宿老の平家貞の子息である平田家継らが勢力を振るった。

南北朝期の抗争を経て室町戦国期には、当地にも足利幕府の影響が及ぶ。14世紀中葉に全国に造立された安国寺（19）は、三田廃寺の北方約0.8kmの地に造立された。

伊賀国には守護として仁木氏が入部した。伊賀国は他地域に比べて比較的独立性の高い小規模領主層が多かったためか、室町期守護による地域支配はあまり進展しなかったとされる。服部川北岸部の上山氏館跡（20）が室町期伊賀守護の館とされている。

上野台地では、後に上野城跡が築かれる位置に「平楽寺」という大規模寺院があったとされる。この寺院は、『三国地志』（近世後期刊）に拠ると後白河相国（平清盛）の創建といい、戦国末期の天正伊賀の乱（1581年）と呼ばれる騒乱では、伊賀国人がここで軍議を開いたとされている（『勢州軍記』近世前期刊）。

d　近世以降の伊賀北部地域

豊臣政権期に伊賀へ入部した筒井氏は、伊賀上野城の前身を築造する。関ヶ原の戦いを経て、藤堂高虎が徳川政権から伊賀国を拝領する。藤堂氏は、筒井氏時代の上野城を大改修した。現在我々が目にする上野城のアウトラインは、ほぼ藤堂高虎段階のものである。また、城下町整備も同時並行で進められ、伊賀国の中枢へと発展していった。

近世の上野城下町は、明治から昭和初期の上野町、昭和16年から平成６年までの上野市、平成６年から現在までの伊賀市の中心市街地へと移り変わった。現在の中心市街地の濫觴が近世の城下町整備にあることを明確に物語っている。

3　上野城跡と城下町

a　上野城と城下町

上野城と城下町に関する研究は、文献史料を中心とした久保文武氏や藤田達生氏らの研究、歴史地理学的な検討をした松山宏氏のほか、福井健二氏による近世絵図の研究など、数多くの研究がある。これらの研究を総合すると、上野城と城下町については、次のような経緯と傾向が窺われる。

①上野城の城郭は、文禄年間（1592～96）頃に、豊臣秀吉配下の筒井定次によって築城された。

②筒井氏に替わり、徳川政権から伊賀国を拝領した藤堂高虎が、慶長16（1611）年に上野城跡の大改修を開始した。

③城郭は上野台地北端部の高所を中心に本丸を築き、内堀を巡らせている。

④本丸の西に御殿、南に家臣団屋敷を配し、その外郭に外堀を巡らせている。

⑤外堀の南面を中心に城下町が展開する。城下町の町筋は矩形を連続する形態で、曲線はほとんど用いられていない。

⑥城下町は、南北筋よりも東西筋が重視されている。

b　該当遺跡と発掘調査履歴

遺跡としての上野城跡・上野城下町は、上野城跡が３種類、上野城下町遺跡が１種類の、合計４種類に区分されている。この区分は行政的なもので、必ずしも遺跡の本質に関わるものではない。行政的な発掘調査は、この区分に従って実施されているため、以下ではそれぞれの履歴を見ていく（表１）。

国史跡上野城跡　上野城跡の内堀内部は国指定史跡の範囲である。ここで実施される発掘調査は、「国史跡上野城跡第○次」として整理されている。

この範囲での発掘調査は、『史跡上野城跡保存整備基本計画』（1998年、上野市）に基づいて実施される計画調査のほか、史跡現状変更に伴う断片的な緊急調査が実施されている。

国史跡崇廣堂跡　内堀の外、外堀の内側にあたる部分で、広義の上野城内部に相当する。崇廣堂は文政４（1821）年に造成された藩校で、それ以前の絵図を見ると、渡辺内膳や藤堂孫八郎といった名が見える、武家屋敷の一角であった。

発掘調査は平成元年度から平成19年度までの間に合計８次が実施されている。これら複数次の調査により、崇廣堂期の建物や便所などが確認されている。なお、史跡の調査という限定もあり、それ以前の武家屋敷地段階の状況はよく分かっていない。

上野城跡　外堀の内側に相当する範囲から、国史跡

上野城跡と国史跡崇廣堂跡部分を除いた範囲が、埋蔵文化財包蔵地でいう「上野城跡」である。遺跡内の開発行為に関しては、伊賀市（旧の上野市）によってその都度対応されている。

代表的な調査としては国史跡崇廣堂跡の東に隣接する崇廣堂武場・武家屋敷跡（2～5次）、東大手門・外堀跡（11・12次）、藤堂新七郎屋敷跡（13次）などが挙げられる。

上野城下町遺跡　上野城外堀の外側が埋蔵文化財包蔵地でいう「上野城下町遺跡」である。上野城下町遺跡の範囲は、近世絵図に表示されている範囲が示されている。

c　藤堂玄蕃とその屋敷

今回の調査対象地となった藤堂玄蕃屋敷の主である、藤堂玄蕃について触れておく。

藤堂玄蕃は、伊賀に入部した藤堂高虎の重臣である。初代の良政は、高虎並びに新七郎家初代の良勝とは従兄弟にあたる。豊臣秀吉の命を受けて豊臣秀次の属臣となるものの、秀次の死後は当時伊予国板島城主であった藤堂高虎の庇護を受ける。関ヶ原の合戦で石田三成の軍と交戦し戦死した。

二代良連が早逝し弟の三代良重が十二歳で家督を継ぐが、大坂冬の陣で戦死したことを受け、弟の四代良次が高虎から5,000石と伊賀上野城中に邸を賜り、それ以後は伊賀附の士大将として幕末までを過ごすこととなった。

良政の家系は代々玄蕃を名乗っている。津藩伊賀付の家臣団としては、藤堂玄蕃家は城代家老に次ぐ5,000石を給付されていた。また、城代家老職は代々、藤堂采女家が世職としていたが、玄蕃家七代良成が享保十六年より十二年間、この城代家老職に就いていた記録も残っている。

藤堂玄蕃屋敷は外堀の内側、東大手門の北に位置する。本丸南側に広がる広大な空き地（馬場）東側の場所にあたる。寛永期頃の絵図で玄蕃家の屋敷が確認できて以後、嘉永七年の伊賀上野地震で屋敷が半壊したときに、一時的に下屋敷に仮住まいを求めたとき以外は、文久年間に至るまでその位置は変化していない。外堀の東面外側に藤堂新七郎とともに長大な下屋敷を有しており、上野城下における玄蕃家の重要性が知られる。　（佐藤）

【参考文献】

・伊賀市編『上野市史』考古編（2005年）
・伊賀市編『伊賀市史』第1巻通史編古代中世（2011年）
・伊賀市編『伊賀市史』第5巻資料編近世（2011年）
・『三重県の地名』（日本歴史地名大系24、平凡社、1983年）
・木下良編『古代を考える　古代道路』（吉川弘文館、1996年）
・『続日本紀』（新訂増補国史大系、吉川弘文館）
・林泉『藤堂家諸家等家譜集』（1984年）
・福井健二『絵図からみた上野城』（伊賀文化産業協会、2010年）
・福井健二『上野城城郭図集』（日本古城友の会、1974年）
・福田典明「上野城下町の町割り成立に関する予察」（『伊賀市文化財年報6（2009年）』伊賀市教育委員会、2010年）
・藤田達生「近世都市の形成過程―伊賀上野を中心に―」（『Mie history』9、三重歴史文化研究会、1998年）
・盆野行輝『安政上野地震の城郭被害』（歴史地震研究会会誌『歴史地震』第33号、2018年）
・松山宏『中世城下町の研究』（近代芸術社、1991年）
・上野市教育委員会『国史跡崇廣堂発掘調査報告』（1994年）
・上野市教育委員会『上野城下町遺跡発掘調査報告―野崎新平下屋敷跡―』（1999年）
・上野市『史跡上野城跡保存整備基本計画』（1998年）
・三重県埋蔵文化財センター『古屋敷遺跡発掘調査報告』（2013年）
・三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡発掘調査報告―東ノ堅町筋（第1～4次）―』（2006年）
・三重県埋蔵文化財センター『上野城跡第13次（藤堂新七郎屋敷跡）発掘調査報告』（2014年）

国史跡上野城跡

次数	調査地点	面積(㎡)	調査機関	調査年度	文献
1次	復興天守東側	86	上野市教委	1996	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報4（1997年）』1998
2次	桝形虎口・表門ほか	20	上野市教委	1999	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報6（1999年）』2000
3次	城代家老屋敷表門	68	上野市教委	1999	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報6（1999年）』2000
4次	内堀西側	10	上野市教委	1999	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報6（1999年）』2000
5次	城代家老屋敷玄関ほか	300	上野市教委	2000	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報7（2000年）』2001
6次	城代家老屋敷	615	上野市教委	2001	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報8（2001年）』2002
7次	城代屋敷南東側空堀跡	40	上野市教委	2002	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報9（1997年）』1998
8次	城代家老屋敷	700	上野市教委	2002	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報9（2002年）』2003
9次	城代家老屋敷北	8	上野市教委	2002	伊賀市教委『伊賀市文化財年報4（2007年）』2008
10次	城代家老屋敷	350	上野市教委	2003	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報10（2003年）』2004
11次	元作事小屋	－	上野市教委	2004	伊賀市教委『伊賀市文化財年報1（2004年）』2005
12次	城代家老屋敷	400	伊賀市教委	2004	伊賀市教委『伊賀市文化財年報1（2004年）』2005
13次	城代家老屋敷台所門・表門	190	伊賀市教委	2005	伊賀市教委『伊賀市文化財年報2（2005年）』2006
14次	城代家老屋敷表門	110	伊賀市教委	2006	伊賀市教委『伊賀市文化財年報3（2006年）』2007
15次	城代家老屋敷台所門西石垣	200	伊賀市教委	2007	伊賀市教委『伊賀市文化財年報4（2007年）』2008
16次	城代家老屋敷台所門西石垣上	120	伊賀市教委	2008	伊賀市教委『伊賀市文化財年報5（2008年）』2009
17次	城代家老屋敷台所門南側裏内道及び石垣崩部	6	伊賀市教委	2009	トレンチ調査
18次	城代家老屋敷台所門周辺	－	伊賀市教委	2010	石垣修復に伴う立会調査
19次	城代家老屋敷大納戸蔵及び台所門東側	125	伊賀市教委	2011	大納戸蔵の範囲確認・台所門小部屋調査
20次	城代家老屋敷台所門東側	85	伊賀市教委	2012	台所門北側・小部屋調査

上野城跡

次数	調査地点	面積(㎡)	調査機関	調査年度	文献
1次	南面内堀	300	上野市教委	1996	上野市教委『上野城跡発掘調査報告』1997
2次	崇廣堂武場・武家屋敷	450	上野市教委	1999	上野市教委『上野城跡（2次）発掘調査報告』2000
3次	崇廣堂武場・武家屋敷	116	上野市教委	2000	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報7（2000年）』2001
4次	崇廣堂武場・武家屋敷	580	上野市教委	2001	上野市教委『上野城跡（4次）発掘調査報告』2002
5次	崇廣堂武場・武家屋敷	147	上野市教委	2001	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報8（2001年）』2002
6次	屋敷地	20	上野市教委	2002	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報9（2002年）』2003
7次	芝の手	4	上野市教委	2002	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報9（2002年）』2003
8次	屋敷地	40	上野市教委	2004	伊賀市教委『伊賀市文化財年報1（2004年）』2005
9次	屋敷地と外堀の間	28	伊賀市教委	2008	伊賀市教委『伊賀市文化財年報5（2008年）』2009
10次	藤堂式部屋敷	150	伊賀市教委	2008	伊賀市教委『伊賀市文化財年報5（2008年）』2009
11次	東大手門・外堀	1,240	伊賀市教委	2009	伊賀市教委『上野城跡（11次）発掘調査報告』2010
12次	東大手門・外堀	224	伊賀市教委	2010	伊賀市教委『上野城跡（12次）発掘調査報告』2011
13次	藤堂新七郎屋敷	45	県埋文センター	2012	三重県埋蔵文化財センター『上野城跡第13次（藤堂新七郎屋敷跡）発掘調査報告』2014
14次	屋敷地（産業会館跡地）	10	伊賀市教委	2012	伊賀市教委『伊賀市文化財年報9（2012年）』2013
15次	藤堂玄番屋敷	873	県埋文センター	2022	三重県埋蔵文化財センター『上野城跡第15次（藤堂玄番屋敷跡）発掘調査報告』2022（本書）

国史跡旧崇広堂

次数	調査地点	面積(㎡)	調査機関	調査年度	文献
1次	崇廣中学校特別校舎跡地	380	上野市教委	1990	上野市教委『国史跡旧崇廣堂発掘調査報告』1994
2次	母屋台所	100	上野市教委	1992	上野市教委『国史跡旧崇廣堂発掘調査報告』1994
3次	北控所周辺	23	上野市教委	1994	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報7』2001
4次	東土塀及び南土塀周辺	350	上野市教委	1996	上野市教委『国史跡旧崇廣堂（4～7次）発掘調査報告』2000
5次	表門・思寿舎	111	上野市教委	1997	上野市教委『国史跡旧崇廣堂（4～7次）発掘調査報告』2000
6次	旧管理棟	107	上野市教委	1997	上野市教委『国史跡旧崇廣堂（4～7次）発掘調査報告』2000
7次	土蔵	54	上野市教委	1999	上野市教委『国史跡旧崇廣堂（4～7次）発掘調査報告』2000
8次	中土塀側溝	17	伊賀市教委	2007	伊賀市教委『伊賀市文化財年報4（2007年）』2008

上野城下町遺跡（主要調査のみ）

次数	調査地点	面積(㎡)	調査機関	調査年度	文献
立会	魚町（東ノ堅町筋）	300	上野市教委	1998	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報5（1998年）』1999
調査	上野田端町第1地点	230	上野市教委	1998	上野市教委『上野城下町遺跡発掘調査報告―野崎新平下屋敷跡―』1999
調査	上野徳居町第1地点（喜多忠兵衛屋敷）	110	上野市教委	1999	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報6（1999年）』2000
調査	上野相生町第1地点（1次）（入交家）	36	上野市教委	2003	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報9（2002年）』2003
調査	上野西大手町第1地点	140	伊賀市教委	2008	伊賀市教委『伊賀市文化財年報5（2008年）』2009
調査	上野忍町第3地点（赤井家）	60	伊賀市教委	2013	
調査	上野東町～上野恵比寿町（東ノ堅町筋）	995	県埋文センター	2000～2005	三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡発掘調査報告―東ノ堅町筋（第1～4次）―』2006
調査	農人町	383	県埋文センター	2012・2013	三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡（第5次）発掘調査報告』2014

第1表　上野城跡関連遺跡の調査歴一覧表

Ⅲ 遺 構

1 基本層序と微地形

（1）調査地の地形

調査地は伊賀市上野市街地の中央部に位置し、津地家裁伊賀支部の敷地内にある。前述のとおり藤堂玄蕃家の屋敷跡に相当する。

上野城は服部川南岸の低丘陵上に築かれた近世城郭で、この築造段階には旧地形の多くが整地・改変を受けたことが考えられる。調査地の地形は平坦地であり、鉄分を含む灰白色シルト層からなる基盤層はほぼ水平方向に拡がることから、築城当初に削平を受けたと考えられる。

（2）基本層序

当地の基本層序は以下の通りで、おおむね４層に分けて考えられる。

①表土（第６図　１・２層）

アスファルトや砕石からなる。旧庁舎の駐車場にともなう層である。

②現代の盛土（同３・６・７・12・14層）

調査区西側ではにぶい黄橙色粗粒砂、東側では灰オリーブ色粘土質細粒砂などからなり、現代ゴミやコンクリート片を含む。

③近代～近世の盛土（同４・９層）

灰褐シルト質砂やにぶい黄色シルト質砂からなり、近世から近代の瓦や陶磁器片などが多数出土した。調査区の北東側で検出されず、近代以降に削平を受けている。

④近世の基盤層（同17層）

鉄分を含むしまりの良い灰白色シルトからなり、この層を基盤とする近世の遺構が検出された。調査区の北東側ではグライ化の程度が強く、しまりがやや弱い。なお、調査区の東西両北隅にて下層確認を実施したが、下層遺構は確認できなかった。

（3）攪乱の状況

当調査区（第４・５図）では、近代以降裁判所として利用されていたことから、広範に近現代の攪乱が確認された。調査区南端では既存庁舎の基礎による攪乱がみられる。南半中央部には全長10mを超える長方形の攪乱坑があり、既存庁舎にともなう浄化槽を撤去した跡である。調査区の北東ではA区とB区の境に溝状の深い攪乱坑があり、金属製の配管やコンクリート片が出土した。この周辺には職員宿舎があったことが知られており、周囲の攪乱坑や基盤層の変質はこの影響によるものと考えられる。

また、調査区全域に近代の裁判所にともなう土管や集水桝が複数箇所で確認された。通常の遺跡であれば攪乱として扱う場合が多いが、本報告では近世から近代にかけての土地利用の実態を理解するため、この一部は遺構として以下で取り上げる。

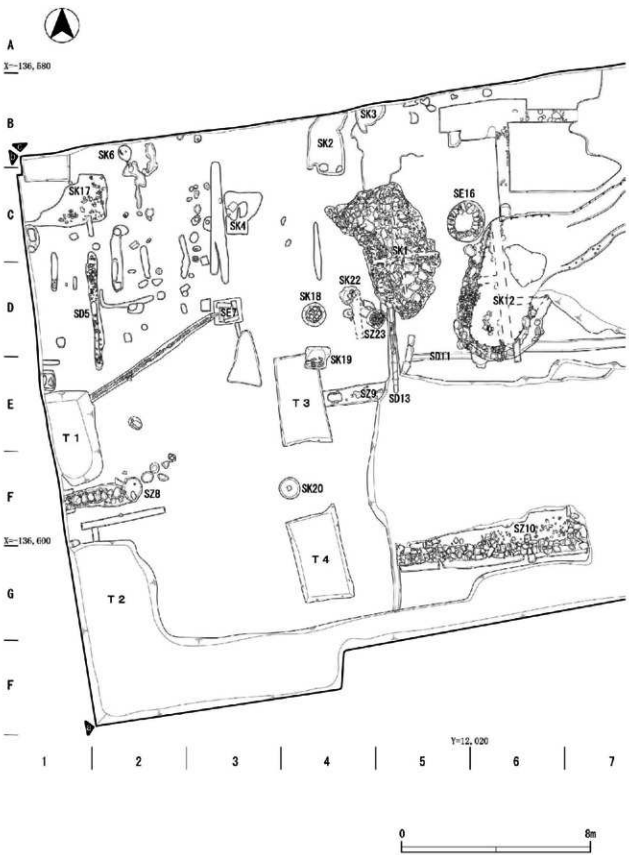
2 遺構の詳細

本調査では江戸時代から近代にかけての遺構が確認された。江戸時代の遺構としては石組井戸、池と考えられる大型土坑、溝や土坑、ピットなどがみつかった。近世の遺構としては集水桝や溝、土坑、ピットなどを確認した。また、所属時期は不明なものの、調査区を東西に横断する石敷遺構をはじめとする用途不明の石列も数箇所で検出した。

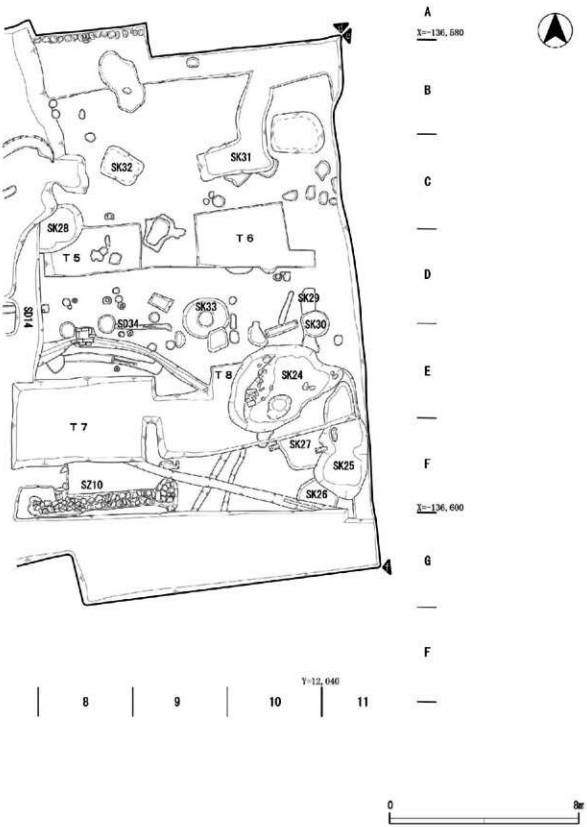
（1）井戸

ＳＥ７　A区西半で検出された集水桝である。検出当初は井戸としたが、内部西壁には南西方向にのびる土管が埋設されており、近代の集水桝と判断した。掘方の平面形は一辺約110cmの正方形で、深さは約40cmを測る。底にモルタルを流し込んだ後に四方にレンガを４段積んでおり、５段目には全長60cm、幅・厚み15cmの長方形の石材を組み合わせて桝枠を形成している。埋土からは集水桝の蓋と思われる大型の板石の他、陶磁器片やガラス片が出土した。

ＳＥ16　A区北半中央で検出された石組井戸である。長径1.８m・短径1.６mの平面楕円形の掘方を有し、地山と石組の間には砂混じりの小礫を充填している。石組には長径30～40cm、短径20cm前後の長球に近い石材を円形に積み上げている。バックホーを用いて断ち割りをおこない、検出面から３m掘削したところで重機のアームが届かなくなり掘削を中止した。井戸内の埋土は、検出面から１mほどはしまりの良



第４図　A区遺構全体図(1:160)

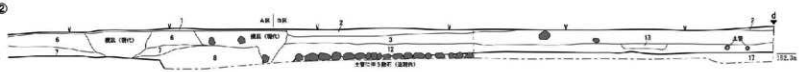


第５図　Ｂ区遺構全体図(1:160)

調査区西壁土層図

調査区北壁土層図①

調査区北壁土層図②



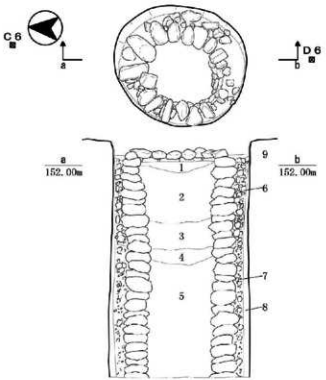
調査区東壁土層図

1. 表土・アスファルト
2. 砂利
3. 10YR 6/3 にぶい黄橙色　細粒砂
　（コンクリート片・灰白斜よび褐灰シルトブロック含）
4. 10YR 4/1 褐灰色　シルト質砂（近世～近代の遺物含）
5. 10YR 5/4 にぶい黄褐色　細粒砂（鉄分含）
6. 7.5Y 6/2 灰オリーブ色　粘土質細粒砂（現代ゴミ含）
7. 10Y 5/2　オリーブ灰色　粘土質細粒砂（現代ゴミ含）
8. 5Y　4/3　暗オリーブ色　粘土質細粒砂（現代ゴミ含）
9.　2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルト質砂（近世～近代の遺物含）
10. 2.5 6/1　黄灰色　細粒砂（礫含・旧庁舎基礎に伴う撹乱）
11. 5Y 6/2　灰オリーブ色　シルト（しまり弱・旧庁舎基礎に伴う撹乱）
12. 2.5Y 4/2 暗灰黄色　細粒砂（土管埋土）
13. 10Y 6/2　オリーブ灰色　粘土質細粒砂（レンガ散）
14. 7.5Y 5/1 オリーブ黒色　シルト
15. 10YR 6/1 褐灰色　細粒砂（灰白シルトブロック・礫含）
16. 10YR 5/2 灰黄褐色　中粒砂（旧庁舎基礎に伴う撹乱）
17. 10Y 7/1　灰白色　シルト（鉄分含・基礎層）

◎遺構土層
ＳＫ２　7.5Y 3/1 灰白色　シルト（しまり弱）
ＳＫ３　7.5Y 3/2 オリーブ黒色　シルト（灰白シルトブロック含）
ＳＫ８　5Y 6/2 灰オリーブ色　シルト（しまり弱）

石・コンクリート

0　2m



SE16

1. 10YR 6/3 にぶい黄褐色シルト（しまり強）
2. 10YR 6/2 灰黄色細粒砂（しまり強）
3. 2.5GY 5/1 オリーブ灰色シルト（しまり弱）
4. 10YR 6/4 にぶ橙色細粒砂
5. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色シルト
6. 7.5Y 6/1 灰色細粒砂＋10cm 大の礫
7. 10Y 5/1 灰色細粒砂＋5cm 大の礫
8. 10YR 7/1 明黄褐色シルト（鉄分を含む地山）
9. 10YR 7/1 灰白色シルト（地山）

0 2m

第７図　ＳＥ16平面図・土層断面図(1:50)

い細粒砂層からなり、18世紀の陶磁器片などが出土した。それより下はグライ化したシルト層が検出され、掘削した範囲では遺物はみられなかった。

（２）土坑・落ち込み

ＳＫ１　Ａ区北半中央で検出された不整形の大型土坑である。長辺5.8m、短辺4.5m、深さ85cm前後の不整形な楕円形の掘方内に大小の石や礫を配置した池状遺構である。掘方の底面には板石を敷きつめており、周縁には人頭大の円礫を用いた石列が巡る。この石列の外側には板石を２～３段ほど壁に立てかけるように配置している。その内側には円礫の石列を基底とする石積が３～４段ほど積み上げられ、これらの隙間を埋めるように径５cm以下の小礫や砂が充填されている。この石積構造は池の護岸あるいは装飾に関係する施設と推測される。

池の埋土としては、最下層には水分を多く含むしまりのない灰色シルトが面的に堆積する。この層は植物遺体などの有機物を多く含むが遺物は少なく、池が機能していた時の堆積と思われる。この上面には礫を含む砂層を挟み、ややしまりがあり鉄分を含む黄灰色シルトが堆積する。この層には18世紀後半から19世紀初頭にかけての陶磁器や土器類、瓦類の他に大型の石材が含まれており、意図的な破壊行為を受けたようである。この上層には近代の土管が設置されており、明治時代以降も滞水していた可能性が高いが、装飾的な池としての機能は失っている。

ＳＫ２　Ａ区中央部の北壁際で検出した不整形の土坑である。長径約2.6m、短径約1.7m、深さ35cmで、近代から現代にかけての磁器やガラス片が出土した。

ＳＫ３　Ａ区中央部の北壁際で検出した不整形の土坑である。長径約1.2m、短径約1.1m、深さ約60cmで、近代から現代にかけての磁器やガラス片が出土した。

ＳＫ４　Ａ区北側の中央部で検出された不整形の落ち込みである。長径約1.8m・短径約1.6m・深さ約20cmである。近代の陶磁器・瓦の細片が出土した。

ＳＫ12　ＳＫ１の東側に位置する大型土坑である。検出時は長楕円形の土坑として認識したが、東側の攪乱部分の掘削をおこなったところ、東側に延びることが判明し、平面Ｌ字状の土坑であるとわかった。全長11.2m、最大幅3.8m、深さ55cm前後を測る。

木杭と板材で護岸をし、その上に砂利や礫を敷き、遺構上端には人頭大の石が巡る。護岸施設の遺存状況はＳＫ１より良く、特に南西側はほとんど破壊を受けていない。ただし、東側は大幅に削平されており、木杭の残存状況から遺構の範囲のみが看取できる。

底面直上には植物遺体などの有機物を多く含む黄灰色シルト層が堆積し、その上には砂や礫の層が重なる。この上面に堆積した褐灰色シルト層から多くの陶磁器類やガラス製品のほか、木製の刷毛や桶、革靴などが出土した。陶磁器類は19世紀以降に位置付けられ、近代の池あるいは貯水槽と考えられる。

ＳＫ６　Ａ区北西隅で検出された平面不整形の落ち込みである。深さ約10cmで非常に浅く、近世から近代にかけての陶器の細片が出土した。

ＳＫ17　Ａ区北西隅に広がる不整形の浅い落ち込みである。全長約2.2m、幅約3.6m、深さは約３cmである。遺構東半では瓦や小礫がまとまって出土しており、ＳＤ５との関連が想定される。

ＳＫ18　Ａ区中央部で検出された平面正円形の土坑である。直径約１m、深さ約60cmを測る。底面には板石が敷き詰められており、土坑の内壁にも板石を立てかけるように配置している。埋土からは近世から近代にかけての土師器や陶器、瓦などが出土した。

ＳＫ19　ＳＫ18の80cm南で検出された平面方形の土坑である。長辺約110cm、短辺約90cm・深さ約60cmである。土坑内には約20cm角の２本の角材を十字にほぞ組みして設置しており、鉄製の番線で固定している。角材の底面には根石を入れており、横木の上には人頭大の石を積んで固定している。埋土からは近世から近代にかけての土師器や陶器、瓦などが出土した。

ＳＫ20　Ａ区中央部南半で検出された平面正円形の土坑である。直径約90cm、深さは15cmを測り、底面中央に石が１個埋まっている。埋土からは近世から近代にかけての陶器の細片が僅かに出土した。

ＳＫ22　Ａ区中央部で検出された不整形の落ち込みである。長径約90cm、短径約80cm、深さ約20cmを測る。底面には径30cmほどの石材が不規則に入り、攪乱を受けている。埋土からは近世から近代にかけての陶器の細片が僅かに出土した。

ＳＫ23　Ａ区中央部で検出された平面正円形の土坑である。直径約40cm、深さ約40cmを測る。拳大以下の円礫が土坑内に敷き詰められている。遺構の用途は不明だが、水琴窟の構造に近似する。埋土からは近世から近代にかけての陶器の細片が僅かに出土した。

ＳＫ24　Ｂ区南東側で検出された平面楕円形の大型土坑である。長径約4.8m、短径3.7m、深さ約1.9mを測る。範囲確認調査の際に攪乱坑として掘削され、遺構検出面が基盤層上面より下がっており、ＳＫ25・ＳＫ27との切り合いは不明である。埋土からは陶磁器類や土器類、瓦類が多く出土しており、17世紀末から18世紀後半の陶磁器を含む廃棄土坑である。

ＳＫ25　ＳＫ24の南側で検出した平面楕円形の土坑である。現代の大型コンクリート管に上層の大部分を削平されており、重機で管を除いたところ、近世の遺物を多く含む層を検出した。長径約4.9m、短径約２m、深さ約60cmを測る。ＳＫ26、ＳＫ27よりも後に掘られている。ＳＫ24と同様に17世紀末から18世紀後半にかけての陶磁器類や土器類、瓦類が多く出土しており、一連の遺構になる可能性がある。

ＳＫ26　ＳＫ25の南側で検出された土坑である。ＳＫ25に切られており、最大径1.6m、深さ約30cmを測る。江戸時代の土師器細片が出土した。

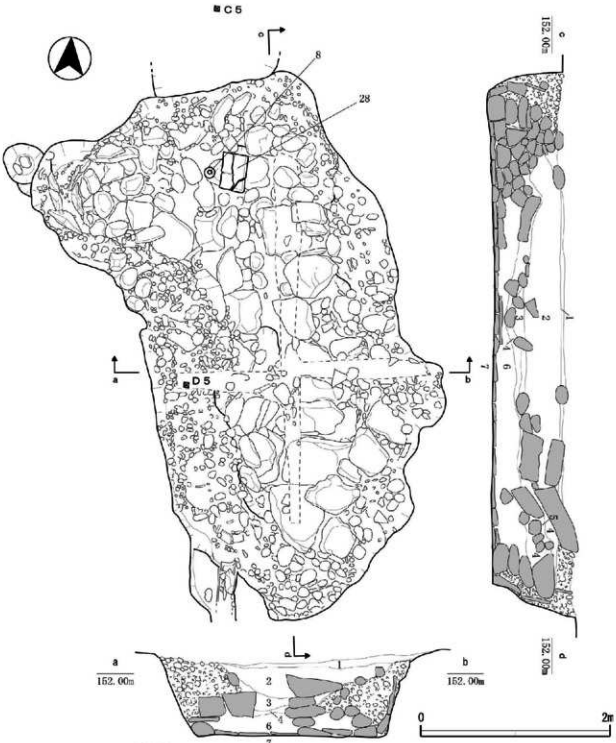
ＳＫ27　ＳＫ25の西側で検出された土坑である。最大幅2.1m、深さ約30cmを測り、ＳＫ25に切られている。江戸時代の土師器細片が出土した。

ＳＫ28　Ｂ区北西部で検出された平面隅丸方形の土坑である。長辺約2.4m、短辺約2.1m、深さ約１mを測る。瓦や陶磁器・ガラス等が出土しており、近代の廃棄土坑である。

ＳＫ29　ＳＫ24の北側で検出された土坑である。長径約2.7m、短径約0.7m、深さ約15cmを測る。ＳＫ24およびＳＫ30を切っている。陶磁器・ガラス等が出土しており、近代以降の廃棄土坑である。

ＳＫ30　ＳＫ29に切られる平面正円形の土坑である。直径約1.1m、深さ約15cmを測る。陶磁器・ガラス等が出土しており、近代の廃棄土坑である。

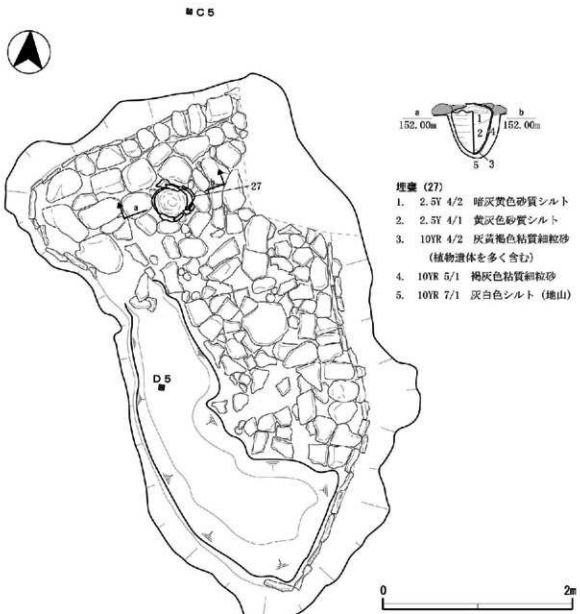
ＳＫ31　Ｂ区北東端で検出された不整形の土坑である。瓦や陶磁器・ガラス等が出土しており、近代以降の廃棄土坑である。



SK1

1. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色細粒砂（しまり強・現代の駐車場に伴う改良土）
2. 2.5Y 4/1 黄灰色シルト（しまり強・江戸時代の遺物を含む）
3. 2.5Y 4/1 黄灰色シルト（鉄分を多く含む）
4. 2.5Y 6/3 にぶい黄色中粒砂（機能時の最終床面か）
5. N 6/0 灰色シルト（しまりなし）
6. 5Y 4/1 灰色シルト（しまりなし・鉄分と植物遺体を多く含む）
7. 10YR 7/1 灰白色シルト（地山）

第８図　ＳＫ１検出時平面図・土層断面図(1:40)



第９図　ＳＫ１床面平面図(1:40)

ＳＫ32　B区北半で検出された不整形の土坑である。瓦や陶磁器・ガラス等が出土しており、近代以降の廃棄土坑である。

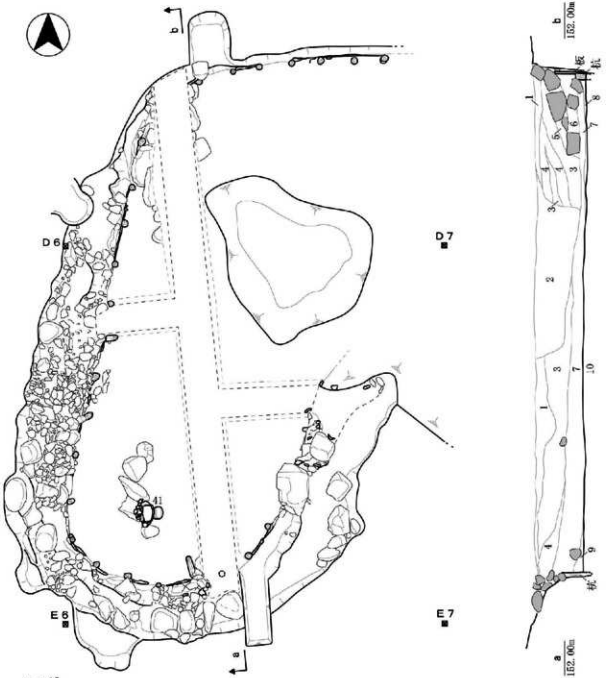
ＳＫ33　B区中央部で検出されたほぼ円形の土坑である。長径約２m、短径約1.7m、深さ約20cmである。近代以降の瓦や陶磁器・ガラス等が出土している。

（3）溝

ＳＤ５　A区北西端で検出された南北方向にのびる溝である。長さ約５m、幅48cm、深さ５cm前後を測る。陶磁器の他に瓦の細片が面的に出土しており、雨落溝の可能性があるが、近代遺物も混入するため積極的に近世遺構として評価することは控える。

ＳＤ11・13・14　A区東半中央部を設置された陶器の配水管に伴う近現代の溝である。

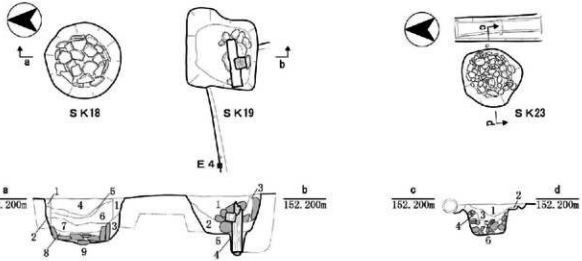
ＳＤ34　B区中央部を東西方向に流れる溝である。残存長2.4m、幅28cm、深さ6cmを測る。近現代の瓦や陶磁器・ガラス等が僅かに出土している。



SK12

1. 10YR 6/2 灰黄褐色シルト（しまり強・現代の駐車場に伴う改良土）
2. 2.5Y 4/1 黄灰色中粒砂（攪乱土）
3. 10YR 4/1 褐灰色シルト
4. 10YR 8/2 灰白色細粒砂
5. 2.5YR 4/1 赤灰色砂質シルト（炭化物を含む）
6. 7.5Y 4/1 灰色シルト（炭化物を含む）
7. 2.5Y 4/1 黄灰色シルト（炭化物と植物遺体を含む）
8. 2.5Y 7/1 灰白色細粒砂
9. 10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルト（植物遺体を含む）
10. 7.5Y 7/1 灰白色シルト（地山）

第10図　ＳＫ12平面図・土層断面図(1:40)



SK18

1. 5Y 8/1 灰白色砂質シルト（暗灰土を含む）
2. 5Y 8/1 灰白色極細粒砂（しまり弱い）
3. 5Y 8/1 灰白色シルト（しまり弱い）
4. 5Y 5/1 灰色薄粒砂（地山ブロック含む）
5. 2.5Y 6/6 明黄褐色シルト
（鉄分と地山ブロックを含む）
6. 5Y 5/1 灰色砂質シルト（鉄分含む）
7. 2.5GY 5/1 明オリーブ灰色シルト
（鉄分を含む・グライ化）
8. N 7/0 灰白細粒砂（しまりなし・グライ化）
9. 10YR 7/1 灰白色シルト（地山）

SK19

1. 2.5GY 7/1 明オリーブ灰色シルト
（範囲確認調査に伴う現代撹乱土）
2. 5Y 7/1 灰白色細粒砂（近世遺物を含む）
3. 5Y 3/2 オリーブ黒色細粒砂
（しまり弱い・現代撹乱土）
4. 5Y 8/1 灰白色砂質シルト（しまり弱い）
5. 10YR 7/1 灰白色シルト（地山）

SK23

1. 7.5YR 6/1 褐灰色極細粒砂（しまり強）
2. 7.5YR 4/1 褐灰色細粒砂
（地山ブロックを含む）
3. 5Y 6/1 灰オリーブ色極薄粒砂
（しまり強い・鉄分を含む）
4. 10YR 3/2 黒褐色細粒砂
5. 7.5Y 5/1 灰色シルト（小礫を多く含む）
6. 10YR 7/1 灰白色シルト（地山）

0 2m

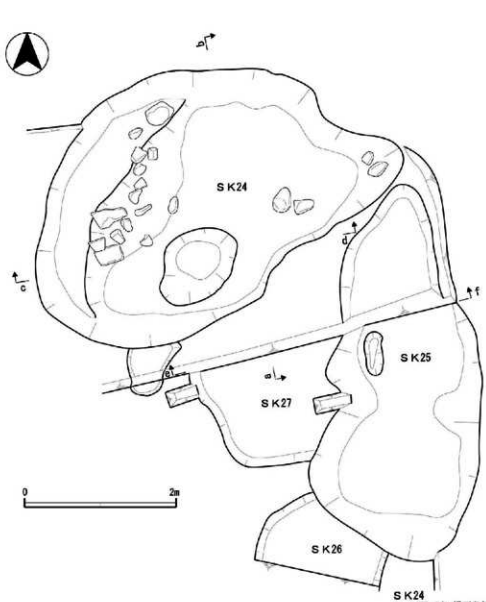
第11図　SK18・19・23平面図・土層断面図(1:50)

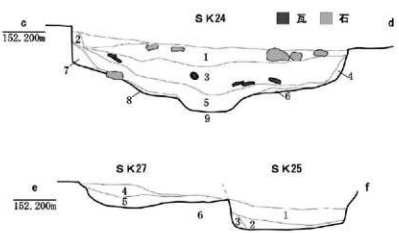
（4）石列

SZ8　A区西壁際で検出された東西にのびる石列である。残存長約3.4m、幅約50cm、深さ10cmの掘方に拳大の小礫を40cm間隔で2列並べた上に、人頭大の平石を並べている。東側は基盤面が上昇しており、石の抜き取り穴と思われるピットが並んで検出された。また、西壁際も石材が抜き取られていた。検出時は石組暗渠を想定したが、断割の結果、基盤層を掘り込んだところに石材が直に置かれており、溝は検出されなかった。石の上面が平坦になるよう配置されており、踏石の可能性がある。掘方埋土からは瓦や陶磁器等が出土している。18世紀後半以降の庭園に伴う可能性がある遺構である。

SZ9　A区中央部で検出された東西にのびる石列である。残存状況が悪く詳細は不明だが、SZ8と同様に小礫を2列並べた間に全長60cm、幅30cm、厚み15cmほどの平石を配置している。この北東1mには同様の大きさの平石が3つ並んでおり、SZ9に接続する可能性もあるが、両側の小礫列を欠いており、性格は不明である。なお、こちらも基盤層直上に配置されており、遺物は出土しなかったものの、SZ8と同様に近世以降の庭園に伴う踏石の可能がある。

SZ10　A区からB区にかけて、調査区の南側で検出された石列である。一部は撹乱を受けているが、残存長は17m前後、最大幅は約2.3mを測る。基本的には幅60cmから70cm前後の掘方に人頭大の石材を2個ないしは3個並べており、その間には黄灰細砂を充填している。東西方向の2mから3mごとに北向きに石列がのびており、石列の北側には基盤層上面に拳大以下の礫が散布している。以上を踏まえ、石垣あるいは築地塀の基礎と考えられる。なお、石材の間には陶器細片とともにレンガ等が出土しており、近世遺構と断定することはできない。　（樋口）

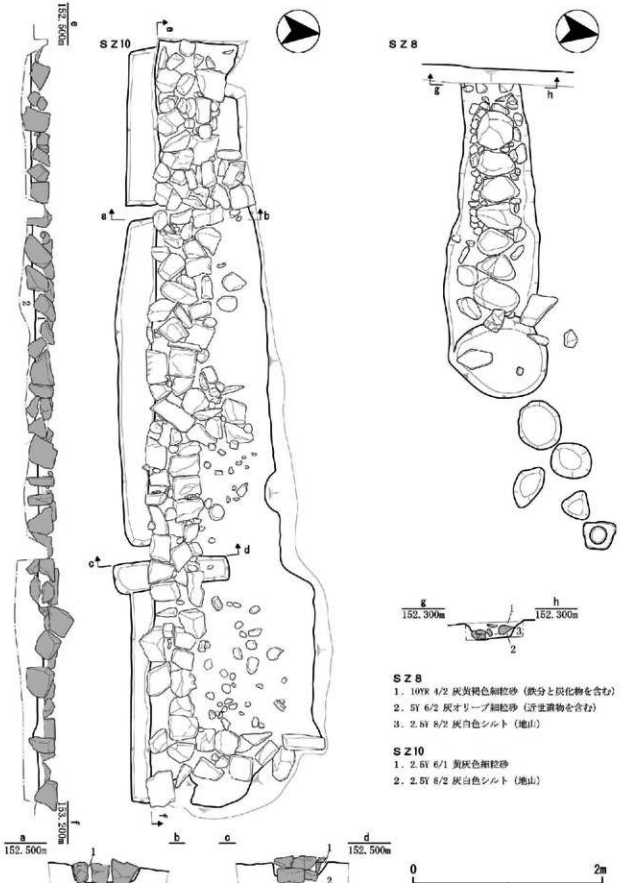




SK24
1．10YR 6/1 褐灰色細粒砂（現代の攪乱土）
2．10YR 8/8 黄橙色シルト
3．10YR 5/1 褐灰色細粒砂（近世遺物を含む）
4．5Y 7/2 灰色中粒砂
5．5Y 5/1 灰色極細粒砂（近世遺物を含む）
6．5Y 7/1 灰白色シルト
7．5Y 7/2 灰色シルト（灰色極細粒砂が混じる）
8．10Y 6/2 オリーブ灰極細粒砂
9．5Y 7/2 灰白色シルト（地山）
10．10YR 3/1 黒褐色中粒砂（現代の攪乱）
11．10YR 5/2 灰黄褐色細粒砂（近世遺物を含む）
12．10YR 4/1 褐灰色細粒砂

SK25・27
1．5Y 4/1 灰色細粒砂（近世の遺物を含む）
2．5Y 5/1 灰色細粒砂（地山ブロックを含む）
3．5Y 7/2 灰白色シルト
4．7.5Y 6/1 灰色細粒砂（鉄分を含む）
5．10Y 5/1 灰色礫粒砂
6．7.5Y 7/2 灰白色砂質シルト（地山）

第12図　ＳＫ24・25・27平面図・土層断面図(1:50)



第13図　ＳＺ８・10平面図・土層断面図(1:40)

略号	番号	調査区	遺構規模（m）			時代	主な出土遺跡	備考
			長さ	幅	深さ			
SK	1	A-C5・D5	5.8	4.52	0.62	江戸時代	陶磁器・瓦	池
SK	2	A-B4	2.64	1.72	0.35	近現代	陶磁器・ガラス	
SK	3	A-B4・B5	1.26	1.16	0.58	近現代	陶磁器・ガラス	
SK	4	A-C3	1.76	1.6	0.18	近代	陶磁器・瓦・ガラス	
SD	5	A-D1・E2	5	0.48	0.05	近世～近代	陶磁器・瓦	雨落溝？
SK	6	A-B2・C2	2.52	0.96	0.09	近世～近代	陶器	
SE	7	A-D3	1.08	1.16	0.12	近代	陶磁器・ガラス	集水桝
SZ	8	A-F2	3.36	1.08	0.06	江戸時代？	陶器	踏石？ 石組暗渠？
SZ	9	A-E4・E5	2.8	0.76	0.07	江戸時代？	陶磁器細片	踏石？
SZ	10	A-G5～G7 B-F8・F9	15.56	2.28	0.16	近代？	陶磁器細片・レンガ	塀基礎？
SD	11	A-D5～G5	3.64	0.52	0.1	近代	陶管	
SK	12	A-C6・D6	6.23	4.08	0.72	近代	陶磁器・瓦・ガラス・銭貨・碁石・革製品	池？ 貯水槽？
SD	13	A-D5～G5	6.72	0.48	0.08	近代	陶管	
SD	14	A-E7	1.22	0.48	0.08	近代	陶管	
SE	16	A-C5・C6	1.76	1.6	3.12	江戸時代	陶磁器	井戸
SK	18	A-D4	1	1	0.61	江戸時代？	土師器・陶器・瓦	貯井戸？
SK	19	A-E4	0.92	1.08	0.58	江戸時代？	土師器・陶器・瓦・銅製品	釣瓶？
SK	20	A-F4	0.92	0.88	0.15	近世～近代	陶器	
SK	23	A-D4	0.78	0.76	0.37	近世～近代	陶器	水琴窟？
SK	24	B-E10	3.68	4.88	1.93	江戸時代	土師器・陶磁器・瓦・硯・砥石・銭貨	ゴミ捨て穴
SK	25	B-F11	4.96	2	0.62	江戸時代	土師器・陶磁器・瓦	ゴミ捨て穴
SK	26	B-F10	1.24	1.72	0.34	江戸時代	陶器	
SK	27	B-F10	1.72	1.92	0.28	江戸時代	土師器	
SK	28	B-C8・D8	2.08	2.44	0.95	近現代	瓦・陶磁器・ガラス	
SK	29	B-E10・ E11	2.68	0.68	0.15	近現代	陶磁器・ガラス	
SK	30	B-E10・ E11	1.12	1.08	0.26	近現代	陶磁器・ガラス	
SK	31	B-C9・ C10	3.4	2	0.26	近現代	瓦・陶磁器・ガラス	
SK	32	B-C8	1.64	1.84	0.16	近現代	瓦・陶磁器・ガラス	
SK	33	B-D9～E8	1.72	1.96	0.17	近現代	瓦・陶磁器・ガラス	
SD	34	B-E8・E9	2.44	0.28	0.06	近現代	瓦・陶磁器・ガラス	

第２表　遺構一覧表

Ⅳ 遺 物

1 遺物の概要

出土遺物は土器・陶磁器・瓦など、コンテナ31箱の約164.7kgである。遺物の時代は近世から近代まであり、江戸時代のものが多い。特にＳＫ24・25からは江戸時代の土器・陶磁器・瓦が多量に出土した。各遺物の詳細は遺物観察表に記した（第３～12表）。

2 遺物の詳細

ＳＥ16 井戸の埋土から磁器や土製品が出土した。

１は土師質の不明土製品である。筒状を呈し、土錘や輪羽口と形状は似るが、平滑な面を有し、用途や機能は不明である。

２・３は肥前系磁器の染付椀である。２は高台内に二重方形枠で囲まれた渦「福」銘が入る。３は見込みに手描きの花弁文が入り、体部外面には草花文を描く。

出土量は僅かであるものの、染付椀の特徴からは18世紀の範疇に収まる遺物群として位置付けられる。

ＳＫ１ 京・信楽系および瀬戸・美濃系の陶器、肥前系磁器、瓦などが出土した。

４～９、12～14、19～21・27は京・信楽系陶器である。４は灯火具、５は灯明皿である。６は小皿である。７・12・13は蓋である。８丸椀で、体部外面に「御次付」、高台内に「次」と読める墨書がある。９は徳利である。14・19は瓶類あるいは甕の底部である。20は脚付台である。21は行平鍋である。27はＳＫ１に底面に添え付けられていた大甕である。体部中央に焼成後穿孔を施す。

10・11・16は肥前系の磁器である。10・11は染付椀で、10は口縁部内面にはやや崩れた四方襷文が入り、外面には抽象化された動植物と思われる図案が描かれ、見込みには「大化年製」の銘が入る。11は外面に梵字文が入る。16は染付椀ないしは絵皿であり、見込みに草花の文様を施す。高台内には二重方形枠で囲まれた「福」銘が入る。

17・18は瀬戸・美濃系陶器の椀である。オリーブ黄色系の透明釉を施す。

15・22～26・28は屋根瓦である。15は右巴の棟込瓦である。22・23は右巴の軒丸瓦で、22は側面端部に面取りを施す。24～26は丸瓦である。26は玉縁に釘穴を有す。28は桟瓦で、尻と頭の両方に釘穴が穿たれる。

肥前系染付椀の文様構成や、京・信楽系陶器に神仏具が含まれることから、18世紀後半から19世紀初頭に位置付けられる。

ＳＫ12 土師器、京・信楽系および瀬戸・美濃系の陶器、肥前系および瀬戸・美濃系の磁器、瓦類、銭貨、碁石などが出土した。

29は土師器の皿である。

30～47（37は除く）は京・信楽系の陶器である。30・31・40は蓋である。32・34・35・38は椀ないし皿である。36・39は瓶類ないしは植木鉢である。36は体部外面に鉄絵を施し、底部に焼成前穿孔がある。41・44は行平鍋である。42は瓶類、43は花瓶である。45は擂鉢である。46・47は甕の底部である。47は底部内面に砂粒が付着する。

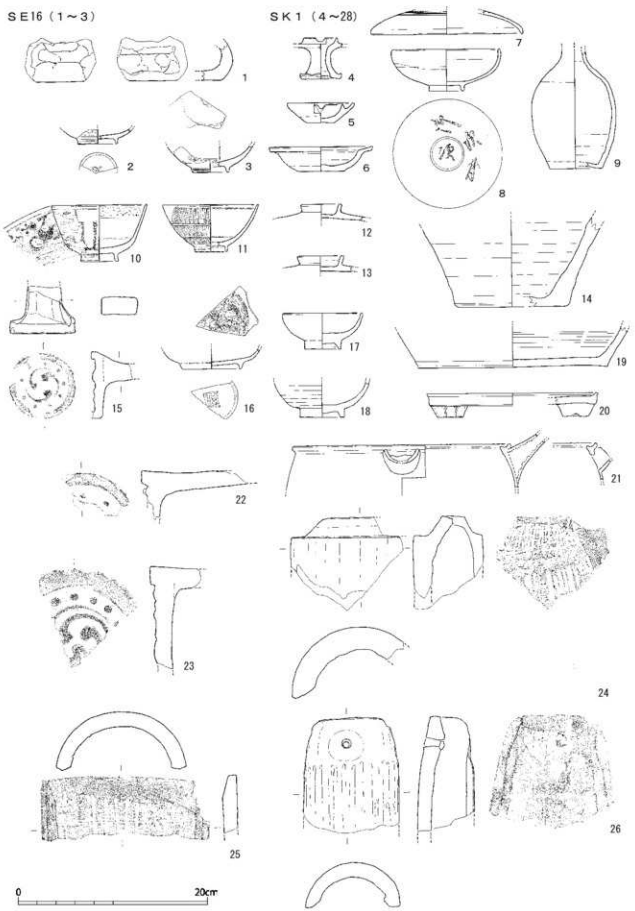
37は瀬戸・美濃系陶器の染付椀である。体部外面に草花の図案を描く。

48～54・69は肥前系の磁器である。48は仏飯器で、外面に蛸唐草文を配す。49～52は椀で、49は花唐草文、50は梅樹文、51は鳳凰文、52は菊花文をそれぞれ配す。53・54は猪口である。53は口縁部内面にはやや崩れた四方襷文が入る。69は染付皿で、口縁部内面に雷文帯が巡る。

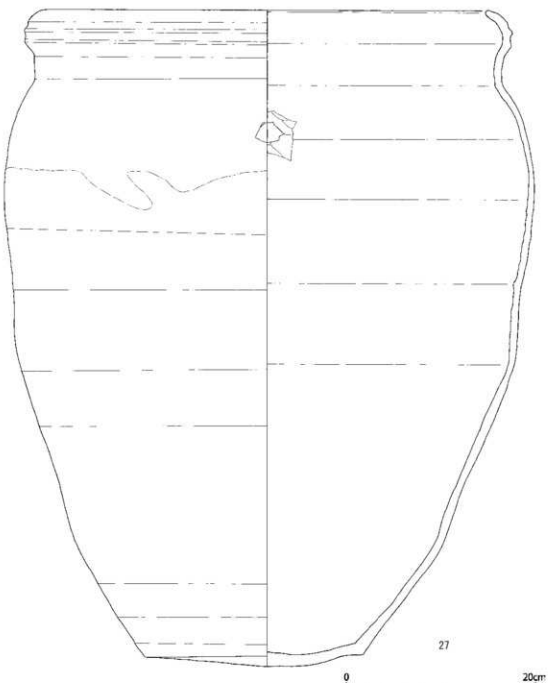
55～68・70・71は瀬戸・美濃系の磁器である。55・57は猪口である。59・60は湯呑である。60の高台内には「隆山」の銘が入り、岐阜県土岐市の隆山窯産のものである。56・58・61～66は椀、67・68・70・71は皿である。61・62・64・65・67・68・70・71には絵付けに型紙摺りや銅板転写を用いるものが含まれる。

72～77・81は屋根瓦である。72は右巴の棟込瓦である。73・74は軒丸瓦である。73は左巴で、瓦当面に光沢のある極細粒砂が面的に付着しており、離れ砂の痕跡と考えられる。75は軒平瓦で、橘状の中心飾りとＹ字状の子葉から構成される。76・81は丸瓦で、凹面には布目がみられる。77は桟瓦である。

78は寛永通宝である。79は碁石である。80は不明陶品で、鉄線が貫通しており、配電に関係するものか。



第14図　SE16・SK1出土遺物(1:4)



第15図　ＳＫ１出土遺物(1:4)

以上、染付磁器椀の装飾技法などからＳＫ12出土の遺物群は19世紀以降のものとして位置付ける。

ＳＫ17　土坑の埋土から陶器と磁器が出土した。

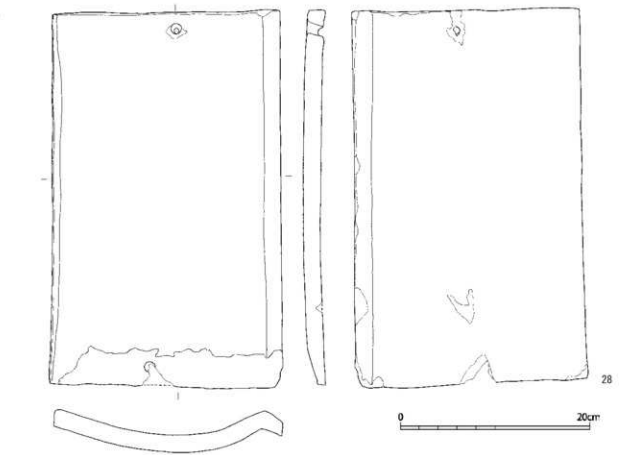
82は京・信楽系陶器の蓋である。

83は瀬戸美濃系磁器の猪口である。高台内に「喜一」と読み取れる文字がみられる。

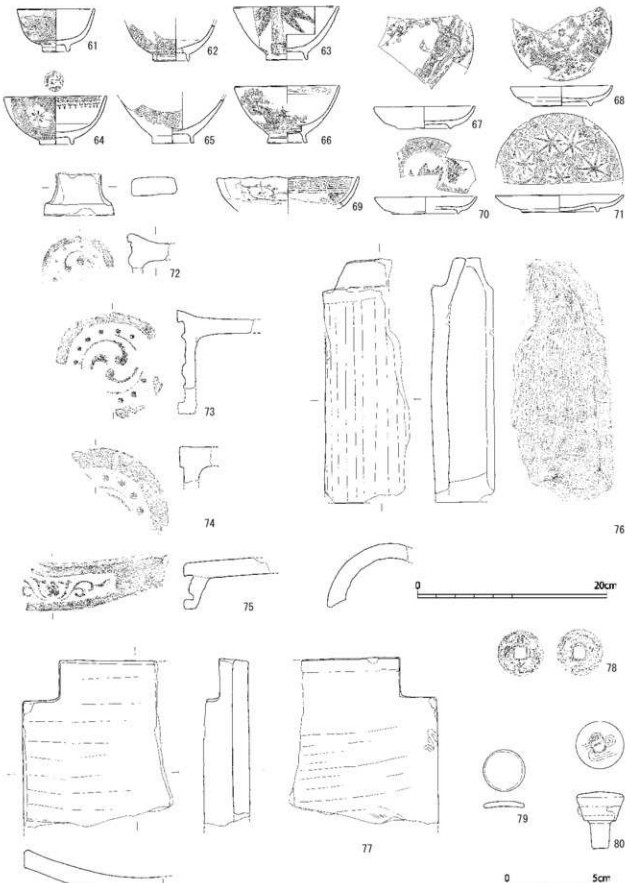
ＳＫ18　土坑の埋土から土師器や陶器、瓦が出土した。84～91は土師質の有孔円盤である。端部は弱く立ち上がり、穿孔はすべて焼成前におこなっている。完形品はなく、意図的に打ち欠いたような破面を有するものもあり、なんらかの祭祀に関わる土製品が想定できる。

92は京都・信楽系陶器の鉢の底部である。93は土師質の火鉢である。94は軒丸瓦で、瓦当文様は蓮華文あるいは菊文に復元できる。

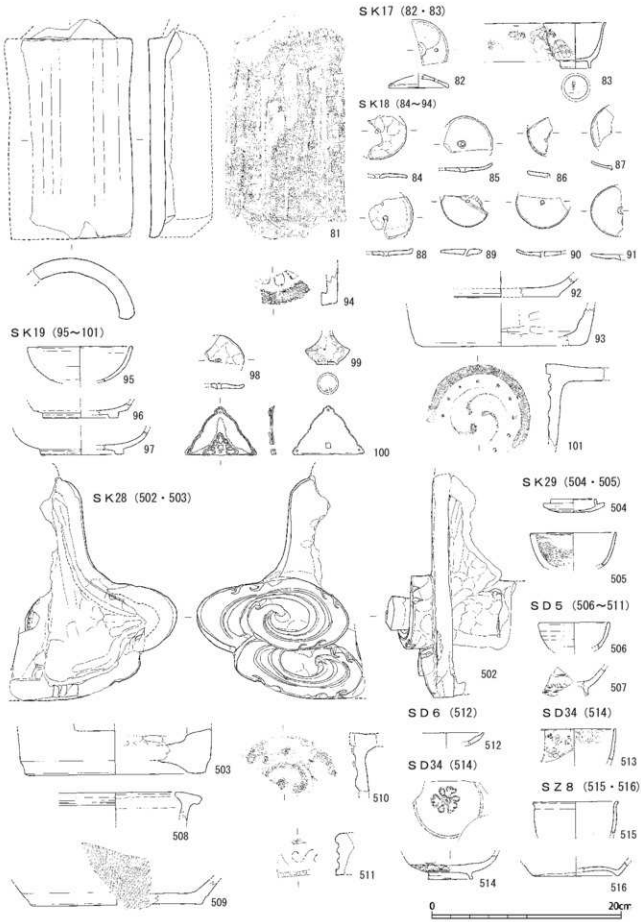
ＳＫ19　土師器や陶器、磁器、瓦、銅製品が出土した。



第16図　ＳＫ１・ＳＫ12出土遺物(1:4)



第17図　ＳＫ12出土遺物(1:4) (78～80は1:2)



第18図　SK・SD・SZ出土遺物(1:4)

98は土師質の有孔円盤である。95～97は京・信楽系陶器の椀または皿である。

99は磁器の花瓶で、近代以降の混入品である。底部外面に「山松」の銘が入る。

101は右巴の軒丸瓦である。

100は銅製の飾金具である。三角形の銅板3枚を貼り合わせて三隅を鋲で留めて製作している。中央に釘を通すための方形の穴が開いている。肉眼観察では、表面に部分的に金箔が残存している箇所があり、三重県総合博物館で蛍光X線分析を実施した結果、銅・金・水銀などが検出された（第13表）。

SK24　大型の廃棄土坑から土師器、京・信楽系および瀬戸・美濃系の陶器、肥前系の磁器、瓦類、銭貨、石製品が出土した。

102～148（146を除く）は土師器である。102～118、131～140は土師皿ないしは灯明皿である。131～136は口縁部に油煙が付着する。136～140は墨書がみられ、記号ではなく何らかの文章が記されているが、多くは判読が難しい。137は「湊□」と読める。

119～129は焙烙で、口縁端部を上方に摘まみ上げるものと端部が肥厚するものがみられる。143・144は土師質の椀であるが、焼成不良の京・信楽系陶器の可能性が高い。

141・142・146～148は火鉢ないしは風炉である。142は口縁部付近に径1㎝ほどの穿孔が複数入る。147・148は高台に円形の穿孔が4方向に入り、148は細い枝のような有機質が残存している。148は高台外面に墨書がみられ、「五□・・・□八日　文□四□□　時□　宝・・・」と読める。

145は焼塩壺である。手づくねで成形しており、体部外面には「泉湊伊織」の刻印が入る。

146は瓦質土器の火鉢である。体部には円形の穿孔と刻み目装飾が入り、方形の窓が復元できる。

149～204、229～258は京・信楽系陶器である。149は卸皿である。150は灯明皿である。151・153は皿である。152は鍋の底部である。154は猪口である。155は仏飯器である。157・158・165・172・181は蓋である。159・180は香炉である。

156・160～164・166～171・173～180・182～188・192～204は椀である。ほとんどが丸椀と平椀だが、筒形椀（160・161・192）も僅かに含まれる。また、156・163・164は外面に絵付けを施す。192・196～199・201～204は高台内部に墨書が入り、「十」や「△」、「〆三」など記号的な内容が目立つ。171は井戸茶碗で、高い高台を有する。189～191は染付絵皿で、190は高台内に「□汁」と読める墨書が入る。

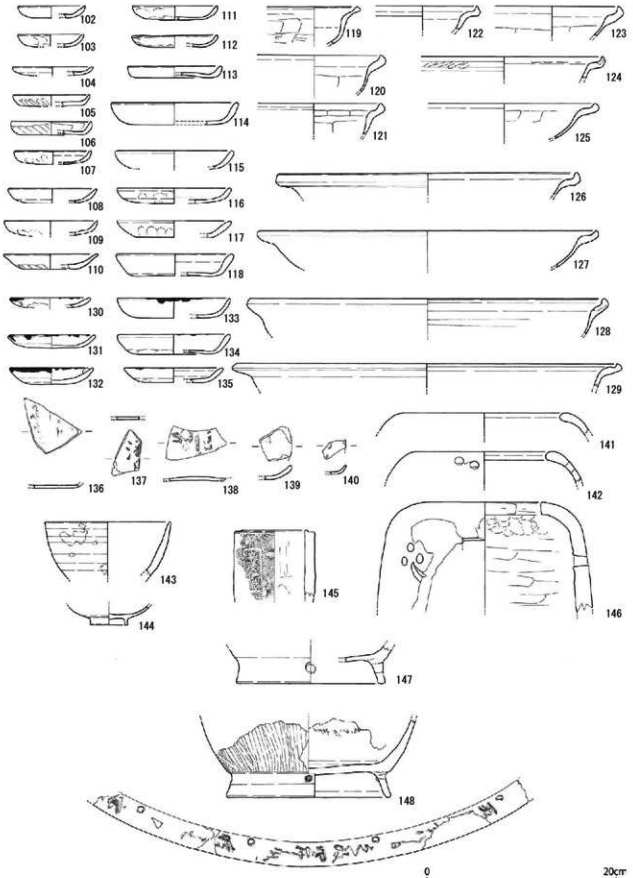
229は有耳壺である。230・233は土瓶である。231・232・235～241は瓶類あるいは水差の底部である。241には底部外面に判読不能の墨書が入る。234は小型甕である。242・243・246・247は鉢である。247には底部外面に墨書が入り、「戊壬二月・・・」と読める。248～253は擂鉢である。254～258は甕である。257は頸部に把手が付く。

206～208、210～228・244・245は瀬戸・美濃系陶器で、喫茶椀が中心である。206～208・210～228は椀である。206は口縁部に二重に施釉しており、いわゆる尾呂茶椀である。226は外面に黒褐色の釉を施す天目茶椀である。222には「楓」、228には「弓」の墨書が高台内に入る。244・245は鉢である。245は体部内面に波状文が巡り、口縁端部を摘まみ上げることから、美濃窯連房Ⅳ期の資料である。

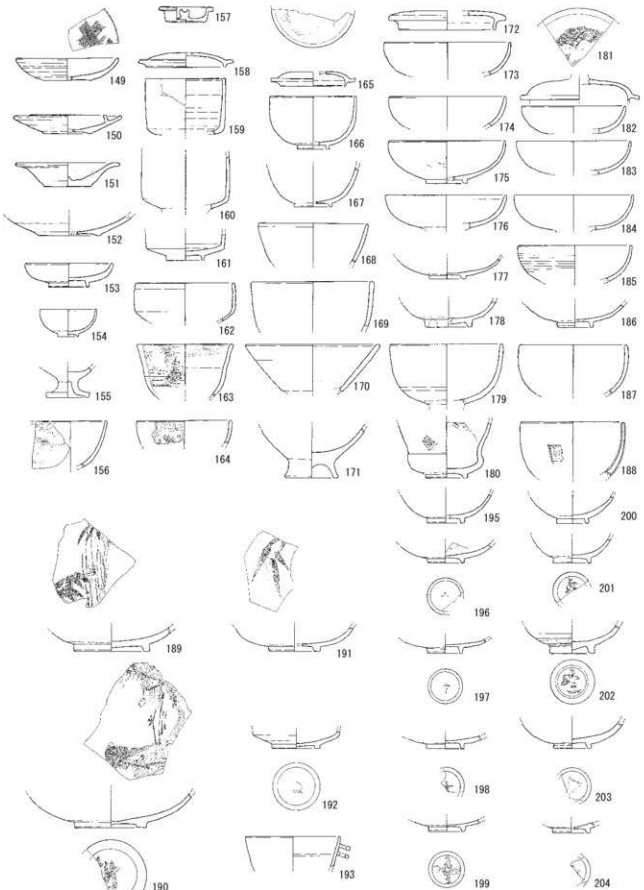
205・209は肥前系陶器の蓋で、外面に草花の図案を配す。

259～326は肥前系の磁器である。259～261は仏飯器である。261は外面に菊花散らし氷裂文を配す。262は蓋である。263は小皿である。264～266・269～277は猪口である。269・270は外面に三菱松文を配す。272・275・276の高台内には「大明年製」の銘が入る。275の高台内には二重方形枠で囲まれた渦「福」銘が入る。267・268は小型の筒形椀である。267は体部外面に緻密な氷裂文が入る。278・279は蓋付椀の蓋である。278は外面に梅樹文、口縁端部内面に四方襷文が巡る。279は外面に青磁釉をかけ、把手内には「富貴長春」の銘が入る。

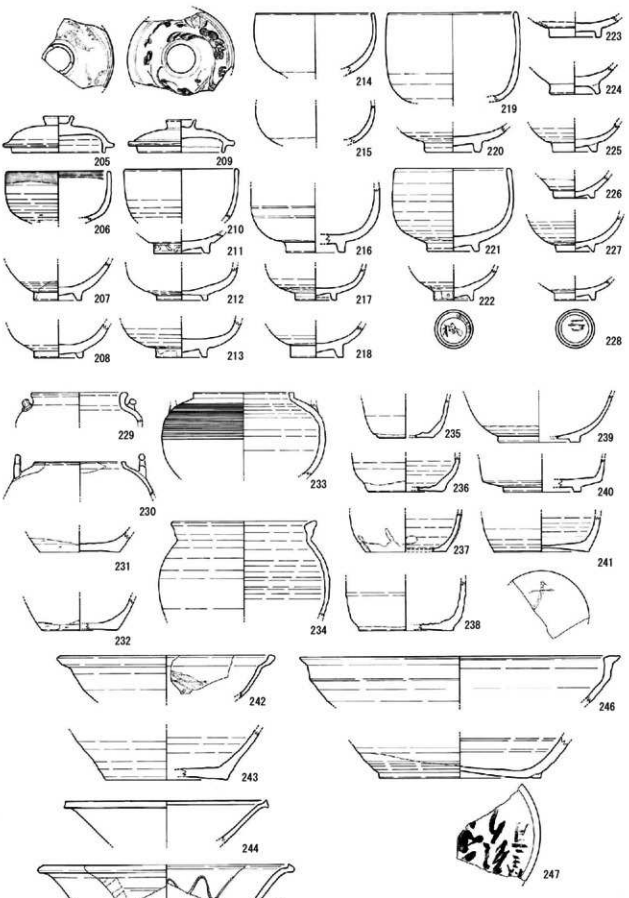
280～314は染付椀である。281・282・286・297・299は草花の図案を配す。283・291・293・313は梅樹や松竹梅など梅を中心とした図案を配す。284は外面に青磁釉をかけ、口縁端部内面に四方襷文が巡り、279の蓋とセット関係を成す。288では外面に赤絵の唐花を施し、金箔が剥離した箇所がみられる。295・296は外面に若松文を配す。291は外面に輪宝



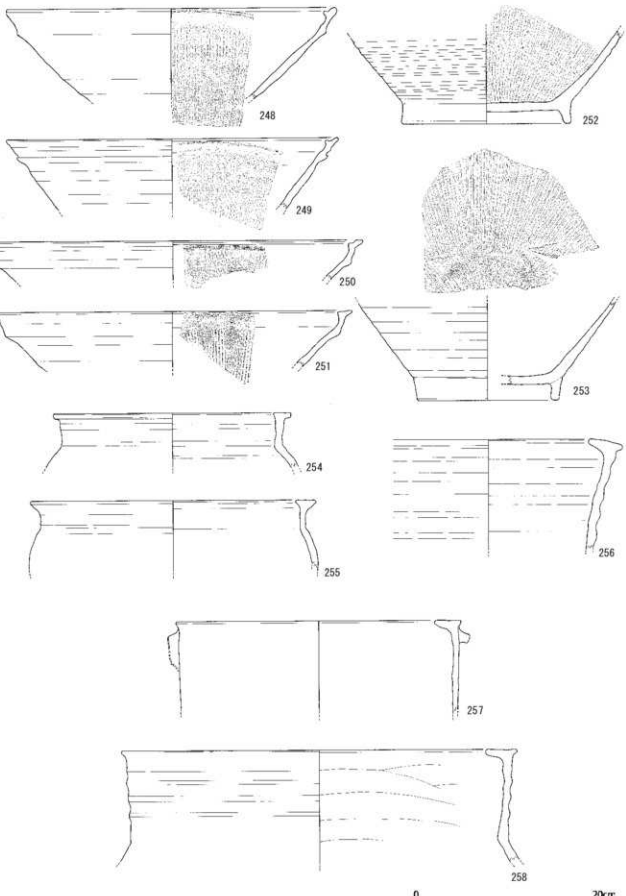
第19図　ＳＫ24出土遺物①(1:4)



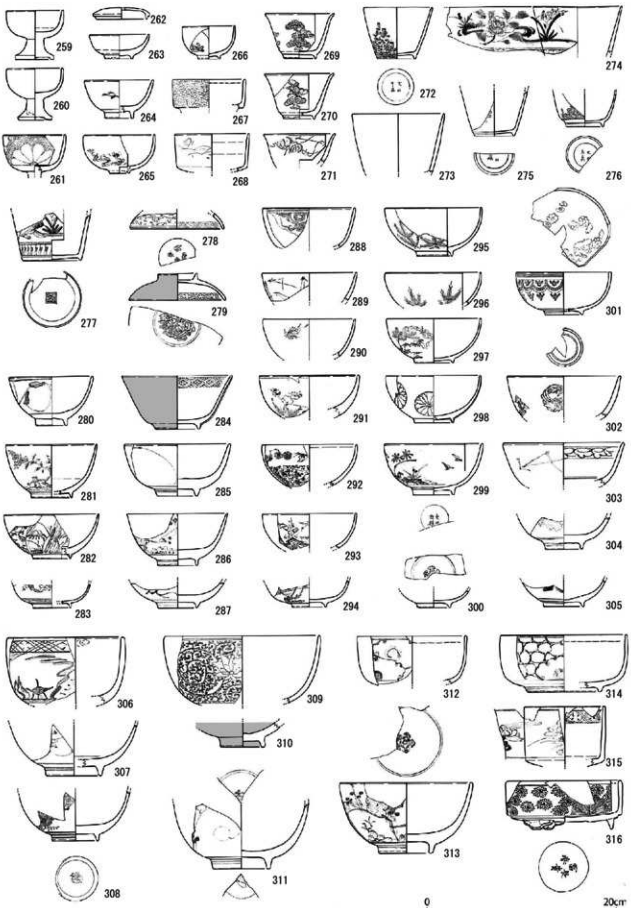
第20図　ＳＫ24出土遺物②(1:4)



第21図　ＳＫ24出土遺物③(1:4)

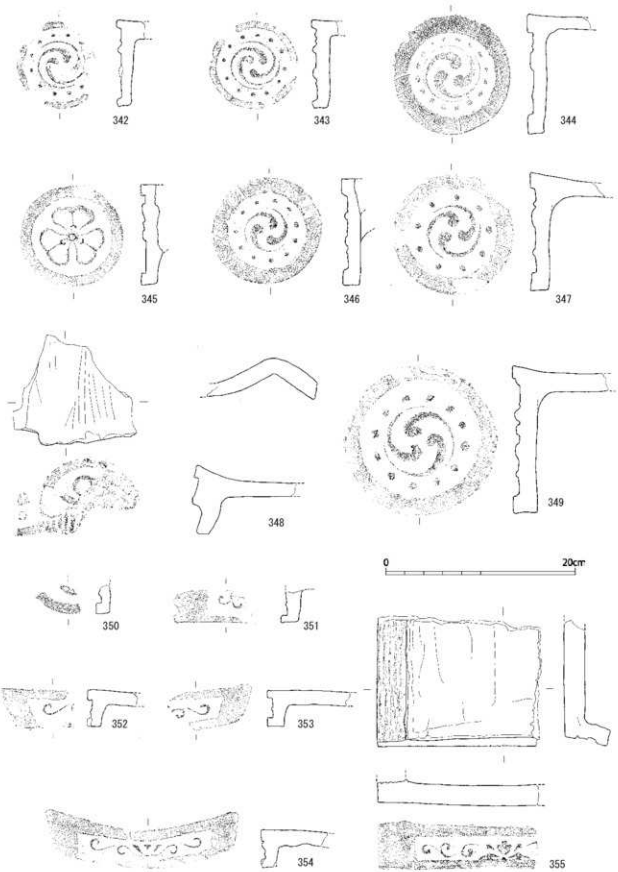


第22図　ＳＫ24出土遺物④(1:4)

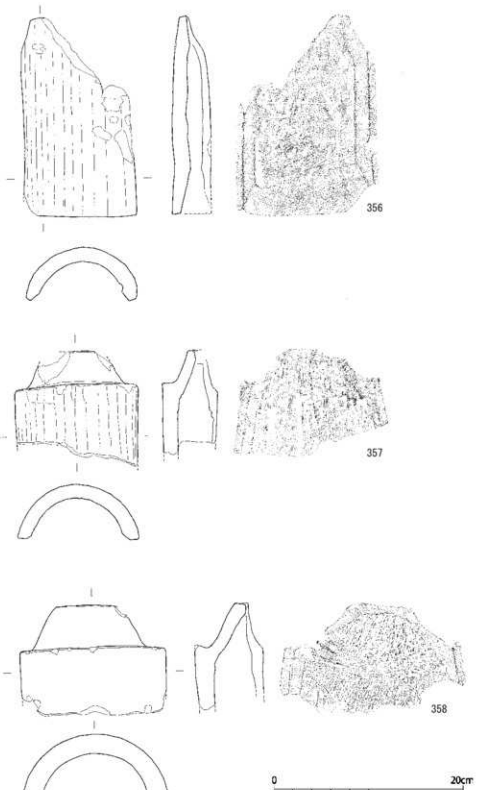


第23図　ＳＫ24出土遺物⑤(1:4)

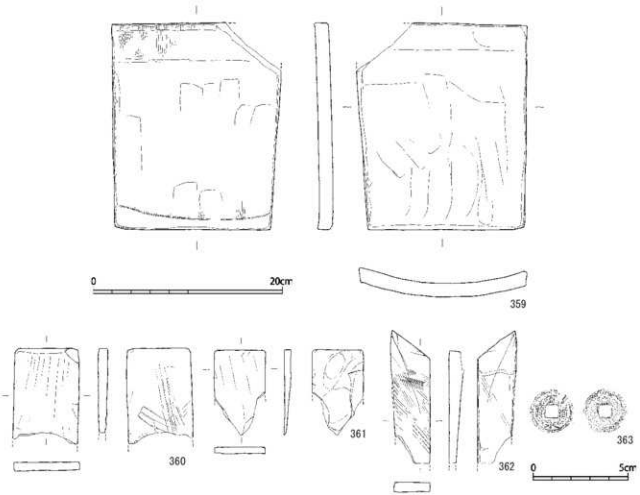
第24図　ＳＫ24出土遺物⑥(1:4)



第25図　ＳＫ24出土遺物⑦(1:4)



第26図　ＳＫ24出土遺物⑧(1:4)



第27図　ＳＫ24出土遺物⑨(1:4) (363は1:2)

文帯が巡り、内面には梅花を散らす。302には鶴丸文、306には楼閣山水文、309は蓮蛸唐草文が体部外面に入る。300・313は見込みにコンニャク印判による五弁花を配す。299には「大明年製」、308には枠なしの渦「福」銘が高台内に入り、311には判読不能の手描き銘が確認できる。

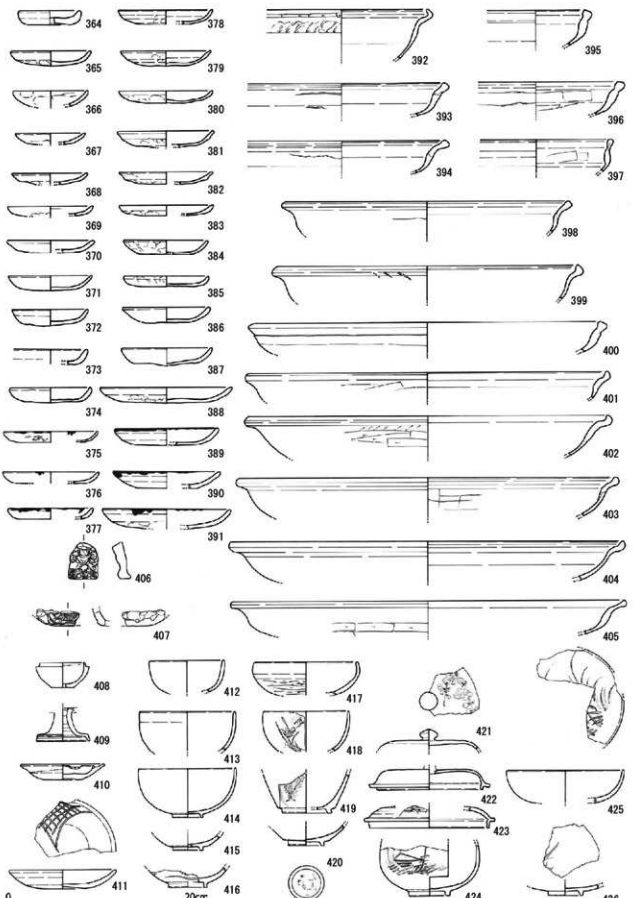
315・316は香炉である。315は体部外面に蓮文、口縁端部内面に四方襷文が巡り、316では底部外面には「富貴長春」の銘が入る。

317～324は皿で、322以外は染付を施す。317・319は見込みにコンニャク印判による五弁花を配し、319は高台内に枠なしの渦「福」銘が入る。318・320は高台内に「大明年製」の銘が入る。321、323の内面には唐草文が入り、322は内外面に青磁釉をかける。325・326は有蓋壺である。

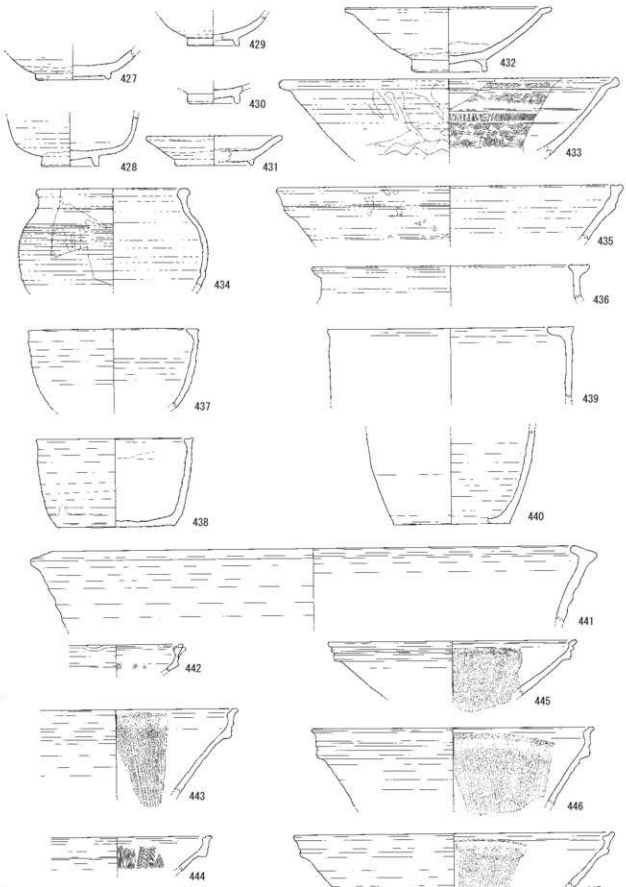
327～359は屋根瓦である。327は右巴の棟込瓦である。328～350は軒丸瓦である。瓦当文様は345・348・350を除くと全て巴文である。345・348・350は片巴文で、348は凸面や瓦当に煤が多く付着する。351～355は軒平瓦である。352～354の瓦当文様は子葉を持たず、354は細身の剣菱形を呈す中心飾りを持つ。355は肉厚な橘状の中心飾りとＹ字状の子葉を持ち、平瓦部の凹面には水返しが剥離した痕跡がある。356～358は丸瓦である。359は平瓦である。

360・361は硯である。362は砥石である。363は寛永通宝である。

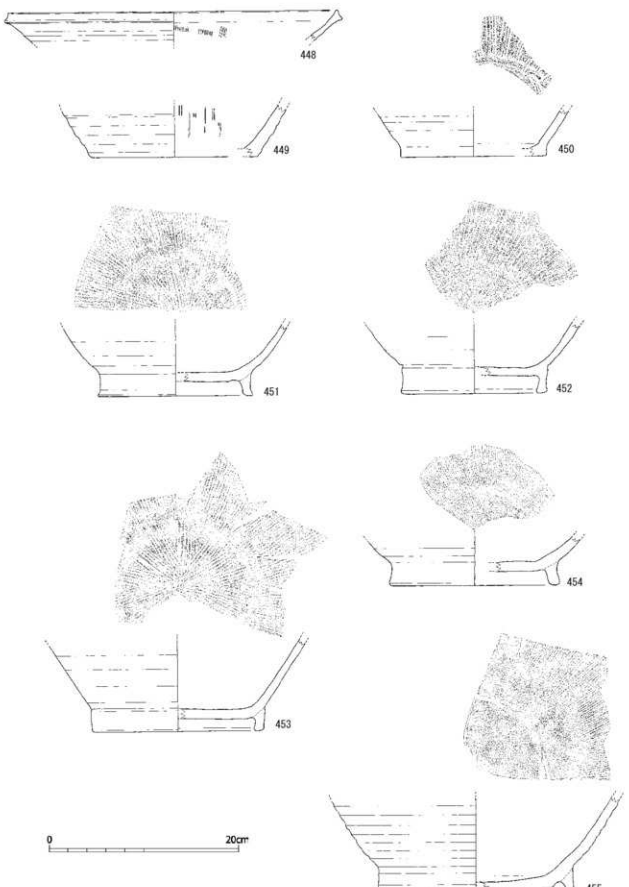
以上、瀬戸・美濃系陶器の型式や、肥前系染付椀の文様構成や装飾技法から、18世紀前半の遺物を中心にしつつ、17世紀末から18世紀後半にかけての遺物群として評価ができる。



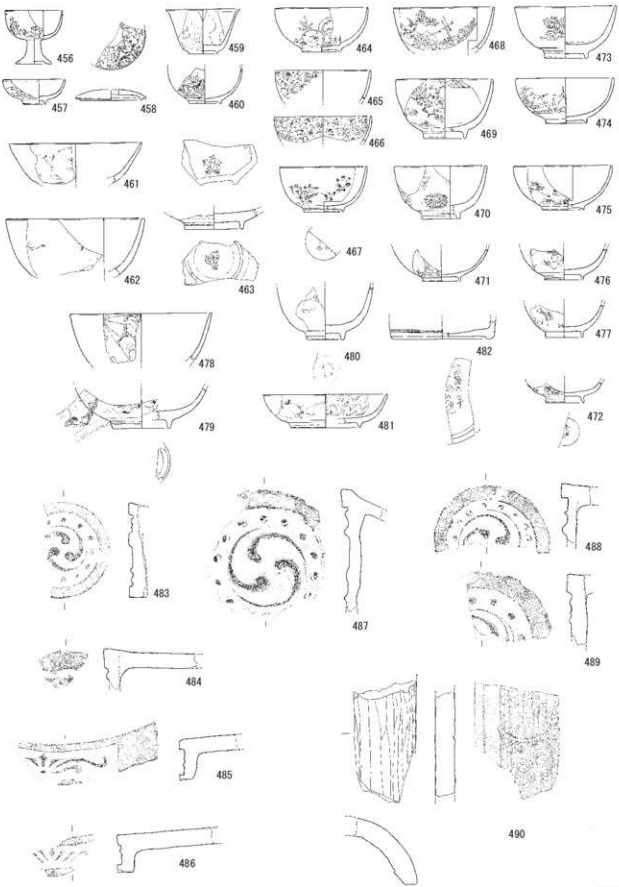
第28図　ＳＫ25出土遺物①(1:4)



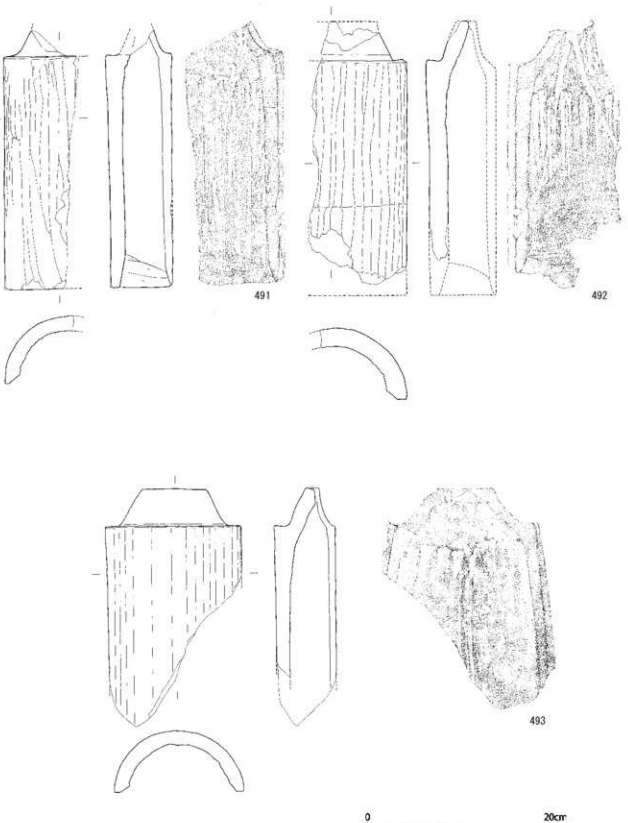
第29図　ＳＫ25出土遺物②(1:4)



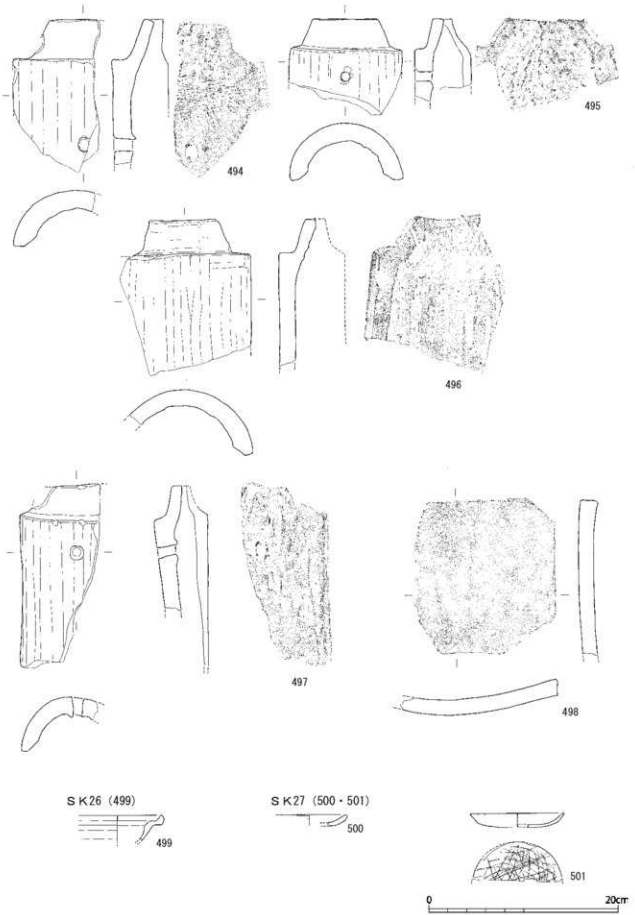
第30図　ＳＫ25出土遺物③(1:4)



第31図　ＳＫ25出土遺物④(1:4)



第32図　ＳＫ25出土遺物⑤(1:4)



第33図　SK25・26・27出土遺物(1:4)

ＳＫ25　土師器、京・信楽系および瀬戸・美濃系の陶器、肥前系の磁器、瓦類が出土した。

364～407は土師器である。364～391は土師皿あるいは灯明皿である。375～377・389～391は口縁端部に油煙が付着する。392～405は焙烙である。口縁端部を摘み上げるもの（392・399・401・402）と玉縁状に肥厚させるもの（393～398・400）の二者及びこの中間的な形態（403～405）が併存している。

406は土師質の土人形で、大黒天を模る。407も土人形の破片で、米俵の一部が残存している。

408～426・434～455は京・信楽系の陶器である。408は小型の蓋物である。409は灯火具、410・411は灯明皿である。412～420・424～426は椀である。418・419・424～426には絵付けを施し、418は菖蒲文、419は若松文、424は楼閣山水文が体部外面に描かれている。425は見込みに草花の意匠が描かれている。420は高台内に判読不能の墨書が入る。421～423は蓋である。434は小型甕である。437・438・440は水差である。435は鉢である。436・439・441は甕である。442～455は擂鉢である。

427～432は瀬戸・美濃系陶器である。427～430は椀、431は皿である。432・433は鉢である。

433は肥前系陶器の鉢である。いわゆる「三島手」で、唐草文、櫛歯文、印花文の象嵌が内面に巡る。

456～482は肥前系磁器である。456は染付の仏飯器で、外面に楼閣山水文が入る。457は染付の小皿で、外面に草花を描く。458は蓋で外面に松竹梅文が巡る。459は型成形の猪口で、近現代の混入品の可能性がある。

460～480は染付椀である。460は外面に大根の図案が描かれる。461・462・464～469・474～476・478～480では草花文、梅樹文、花唐草文などを配す。470・473では菊、477では赤絵の鶴が体部外面にそれぞれ描かれている。463は見込みにコンニャク印判による五弁花を配し、高台内に枠がない渦「福」銘が入る。467・472は高台内に「大明年製」、480には判読不能の銘がそれぞれ入る。481は皿で、内面に矢羽根文が巡る。482は徳利あるいは瓶類で、高台内に「貳?拾六年□□□」と読める墨書が認められる。

483～498は屋根瓦である。483・484・487～489は軒丸瓦で、瓦当文様はすべて巴文である。485・486は軒平瓦で、瓦当文様の中心飾りには細身の剣菱形の装飾が入る。490～497は丸瓦で、494・495・497は釘穴を有す。498は平瓦である。

以上、肥前系陶磁器の文様構成や装飾技法から、ＳＫ24と同様に17世紀末から18世紀中ごろの遺物群として評価ができる。

ＳＫ26　499は土師器の焙烙である。口縁端部を摘まみ上げて成形する。

ＳＫ27　500・501は土師器の皿である。501は内面に線刻が入る。

ＳＫ28　ガラス片や現代遺物とともに火鉢や瓦が出土した。503は土師質の火鉢で、方形の窓を有す。502は鬼瓦である。

ＳＫ29　ガラス片や現代遺物とともに陶器や磁器が出土した。504は京・信楽系陶器の灯明皿である。505は瀬戸・美濃系磁器の椀で、染付には型紙摺り技法を用いる。

ＳＤ５　多量の瓦細片とともに陶器、磁器、瓦などが出土した。506は瀬戸・美濃系陶器の椀である。

507は肥前系磁器の染付椀である。

508・509は京・信楽系陶器である。508は水差あるいは甕の口縁部である。509擂鉢の底部である。

510・511は屋根瓦である。510は軒丸瓦で、瓦当には巴文が入る。511は軒平瓦で瓦当には細身の唐草文が入る。

ＳＤ６　512は土師器の皿の小片である。

ＳＤ13　513は肥前系磁器の椀である。外面には梅樹文、口縁端部内面には四方襷文が入る。

ＳＤ34　514は肥前系磁器の染付椀である。外面には草花を描き、見込みには六弁花が入る。

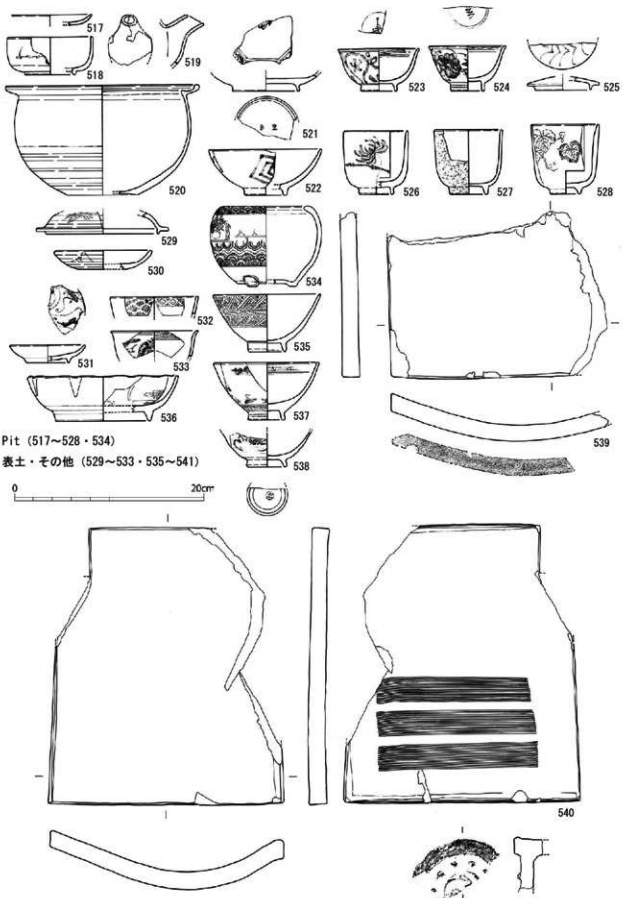
ＳＺ８　京・信楽系の陶器が出土した。515は椀である。516は鍋の底部片である。

Ｐｉｔ　土師器、京・信楽系陶器、肥前系磁器、瀬戸・美濃系磁器が出土している。

517は土師器の皿である。

518～520は京・信楽系の陶器である。518は平椀である。519は急須である。520は行平鍋である。

521は肥前系磁器の染付皿である。高台内には「宣徳年製」あるいは「宣明年製」の銘が復元できる。



第34図　包含層・表土出土遺物(1:4)

522～528・534は瀬戸・美濃系磁器である。522は染付椀、523・524は猪口、525は蓋、526～528は湯呑茶椀である。535は香炉である。523・524の高台内には判読不能の銘が入る。

包含層・表土　京・信楽系陶器、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、瓦などが出土している。

529は京・信楽系陶器の蓋である。

530は瀬戸・美濃系陶器の皿である。にぶい黄褐色の釉を施す。

531～533・536は肥前系磁器である。531・536は染付皿、532・533は染付椀である。536の破断面には漆と思われる付着物が確認され、割れた後も修繕して使用していたことが窺える。

535・537・538は瀬戸・美濃系磁器の椀である。535は染付に型紙摺り技法を用いる。538の高台内には戦時中の統制番号と思われる「品148」の銘がみられ、愛知県瀬戸市品野で生産されたものである。体部外面にケズリ調整時に付いたと考えられる工具痕が帯状に巡る。

539～541は屋根瓦である。539・540は平瓦ないしは桟瓦である。端部が欠損するためいずれかに確定することは難しいが、桟瓦の小片と共伴することから後者の可能性が高い。539の側面には「尾州　○庄　特製」の刻印が入る。541は軒丸瓦で、瓦当には巴文が入る。　（樋口）

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	部位残存度	法量（cm）口径	底径	器高	技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
1	43-1	土師器	不明	A-C5	SE16					オサエ	密	良	にぶい橙	
2	43-2	磁器（肥前系）	染付椀	A-C5	SE16	4/12		4.0		施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
3	43-3	磁器（肥前系）	染付椀	A-C5	SE16	4/12		3.8		施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
4	64-7	陶器（京・信楽系）	灯火具	A-C5	SK1	6/12	3.5	4.0	4.4	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
5	64-8	陶器（京・信楽系）	灯明皿	A-C5	SK1	8/12	7.0	3.0	1.7	ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰黄	
6	85-1	陶器（京・信楽系）	小皿	A-C5	SK1	3/12	10.8	4.9	2.6	ロクロナデ、糸切り痕	密	良	灰白	
7	84-3	陶器（京・信楽系）	蓋	A-C5	SK1	2/12	16.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
8	86-4	陶器（京・信楽系）	丸椀	A-C5	SK1	11/12	11.2	3.5	4.4	ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:淡黄	墨書あり
9	41-3	陶器（京・信楽系）	徳利	A-D5	SK1			5.5		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:褐	
10	65-2	磁器（肥前系）	染付椀	A-C5	SK1	3/12	10.0	3.8	6.0	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
11	85-3	磁器（肥前系）	染付椀	A-C5	SK1	2/12	10.0	3.4	5.0	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	梵字文（外面）
12	64-1	陶器（京・信楽系）	蓋	A-C5	SK1	10/12				ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:淡黄	
13	64-2	陶器（京・信楽系）	蓋	A-C5	SK1	8/12				ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	やや良	素地:灰白 釉色:灰黄	
14	83-2	陶器（京・信楽系）	瓶類か	A-C5	SK1	4/12		11.4		ナデ、ロクロナデ	密	良	橙	
16	65-6	磁器（肥前系）	染付椀	A-C5	SK1	3/12		6.3		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
17	82-6	陶器（瀬戸・美濃系）	椀	A-C5	SK1	小片	8.2	3.8	3.8	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
18	64-3	陶器（瀬戸・美濃系）	椀	A-C5	SK1	12/12		4.6		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	やや良	素地:灰白 釉色:オリーブ褐	
19	63-2	陶器（京・信楽系）	甕か	A-C5	SK1	2/12		20.0		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	やや良	素地:灰白 釉色:灰白	
20	85-2	陶器（京・信楽系）	脚付台	A-C5	SK1	2/12	18.0	15.8	2.5	ロクロナデ	密	良	灰白	
21	83-1	陶器（京・信楽系）	行平鍋	A-C5	SK1	1/12	23.0			施釉	密	良	素地:淡黄 釉色:淡黄	
27	127-1	陶器（京・信楽系）	大甕	A-C5	SK1	7/12	46.5	23.2	68.5	ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤褐	焼成後穿孔（1箇所）
29	78-3	土師器	皿	A-D5	SK12	2/12	13.6	10.8	2.15	ナデ、ヨコナデ	密	やや良	にぶい橙	
30	77-5	陶器（京・信楽系）	蓋	A-D5	SK12	8/12				ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
31	78-1	陶器（京・信楽系）	蓋	A-D5	SK12	11/12				ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰黄	
32	84-5	陶器（京・信楽系）	椀	A-D6	SK12	2/12	11.6			ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:淡黄	
33	4-1	陶器（京・信楽系）	椀	A-D6	SK12	5/12		7.0		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	浅黄橙	底面墨書
34	80-1	陶器（京・信楽系）	椀	A-D6	SK12	12/12		3.7		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
35	80-3	陶器（京・信楽系）	椀か	A-D6	SK12	11/12		4.0		ロクロナデ	密	良	灰白	
36	80-5	陶器（京・信楽系）	植木鉢	A-D6	SK12	1/12	10.7	8.0	9.5	ロクロナデ、鉄絵	密	良	素地:浅黄橙 釉色:灰褐	底部穿孔
37	80-7	陶器（瀬戸・美濃系）	染付椀	A-D6	SK12	2/12	8.0				密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
38	80-2	陶器（京・信楽系）	椀か	A-D6	SK12	8/12		3.6		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
39	76-1	陶器（京・信楽系）	瓶類	A-D5	SK12	12/12		7.4		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:きび釉	底部糸切り痕
40	34-1	陶器（京・信楽系）	蓋	A-D5	SK12	3/12	15.8			ロクロナデ後施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
41	41-1	陶器（京・信楽系）	行平鍋	A-D6	SK12	12/12	17.2	7.2	11.5	ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:淡黄 釉色:浅黄	脚三方向、煤付着
42	78-2	陶器（京・信楽系）	瓶類	A-D5	SK12	3/12	4.7			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
43	78-6	陶器（京・信楽系）	花瓶	A-D6	SK12	9/12	1.6	3.0	6.8	ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰黄 釉色:暗緑灰	
44	76-4	陶器（京・信楽系）	行平鍋	A-D5	SK12	3/12		6.0		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:透明	煤付着
45	84-2	陶器（京・信楽系）	擂鉢	A-D6	SK12					ロクロナデ、施釉	密	良	素地:淡赤橙 釉色:にぶい赤褐	
46	41-2	陶器（京・信楽系）	甕	A-D5	SK12	12/12		12.6		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤褐	底部内面に砂粒付着
47	77-4	陶器（京・信楽系）	甕	A-D5	SK12	2/12		11.6		ロクロナデ	密	良	外面:明黄褐 内面:黄灰	
48	34-2	磁器（肥前系）	仏飯器	A-D5	SK12	12/12				施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	蛸唐草文（外面）
49	77-1	磁器（肥前系）	染付椀	A-D5	SK12	1/12	9.8			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:透明	花唐草文（外面）
50	82-2	磁器（肥前系）	染付椀	A-D6	SK12	6/12		3.0		施釉	密	良	素地:白 釉色:白	梅樹文（外面）
51	82-4	磁器（肥前系）	染付椀	A-D6	SK12	小片	7.4	4.0	4.1	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	鳳凰文（外面）
52	34-3	磁器（肥前系）	染付椀	A-D5	SK12	3/12		3.6		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
53	82-5	磁器（肥前系）	猪口	A-D6	SK12	小片	7.0	6.0	6.7	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
54	78-4	磁器（肥前系）	猪口	A-D6	SK12	6/12		4.5		施釉	密	良	素地:白 釉色:透明	
55	80-4	磁器（瀬戸・美濃系）	猪口	A-D6	SK12	9/12	6.0	3.0	4.55	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
56	77-2	磁器（瀬戸・美濃系）	染付椀	A-D5	SK12	1/12	8.9			施釉	密	良	素地:白 釉色:透明	
57	80-6	磁器（瀬戸・美濃系）	猪口	A-D6	SK12	12/12		3.4		施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
58	78-5	磁器（瀬戸・美濃系）	椀	A-D6	SK12	3/12	8.2	2.6	3.8	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
59	82-3	磁器（瀬戸・美濃系）	湯呑茶椀	A-D6	SK12	5/12	6.6			施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
60	77-3	磁器（瀬戸・美濃系）	湯呑茶椀	A-D5	SK12	12/12	5.6	3.1	7.1	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	高台内「陶山」銘
61	80-8	磁器（瀬戸・美濃系）	染付椀	A-D6	SK12	1/12	8.2	2.6	4.6	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
62	78-7	磁器（瀬戸・美濃系）	染付椀	A-D6	SK12	3/12		3.6		施釉	密	良	素地:白 釉色:透明	
63	42-2	磁器（瀬戸・美濃系）	染付椀	A-D6	SK12	2/12	11.0	4.2	5.7	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
64	82-1	磁器（瀬戸・美濃系）	染付椀	A-D6	SK12	3/12	10.8	3.4	5.1	施釉	密	良	素地:白 釉色:透明	
65	69-4	磁器（瀬戸・美濃系）	染付椀	A-D5	SK12	12/12		4.3		施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	

第３表　遺物観察表①

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	部位残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
66	56-6	磁器（瀬戸・美濃系）	染付碗	A-D6	SK12	12/12	11.0	4.0	6.1	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
67	76-5	磁器（瀬戸・美濃系）	染付皿	A-D5	SK12	1/12	10.5	5.5	2.35	施釉	密	良	素地:白 釉色:透明	
68	76-6	磁器（瀬戸・美濃系）	染付皿	A-D5	SK12	7/12	10.6	6.0	2.1	施釉	密	良	素地:白 釉色:透明	
69	17-3	磁器（肥前系）	染付皿	A-D6	SK12	3/12	15.0			施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
70	34-4	磁器（瀬戸・美濃系）	染付皿	A-D5	SK12	2/12	10.8	6.8	1.8	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
71	69-3	磁器（瀬戸・美濃系）	染付皿	A-D5	SK12	5/12	13.4	8.1	1.8	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
82	53-2	陶器（京・信楽系）	蓋	A-C2	SK17	4/12	6.2			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
83	53-1	磁器（瀬戸・美濃系）	猪口	A-C2	SK17	1/12	6.5	3.0	4.8	ロクロナデ後施釉、ケズリ出し高台	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
84	79-4	土師器	有孔円盤	A-D4	SK18					ナデ、オサエ	密	良	にぶい橙	穿孔あり
85	79-2	土師器	有孔円盤	A-D4	SK18					ナデ、オサエ	密	良	にぶい橙	穿孔あり
86	63-3	土師器	有孔円盤	A-D4	SK18					ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	穿孔あり
87	63-4	土師器	有孔円盤	A-D4	SK18					ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	穿孔あり
88	79-3	土師器	有孔円盤	A-D4	SK18					ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	穿孔あり
89	63-5	土師器	有孔円盤	A-D4	SK18					ナデ、ヨコナデ	密	良	灰黄	穿孔あり
90	63-6	土師器	有孔円盤	A-D4	SK18					ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい橙	穿孔あり
91	63-7	土師器	有孔円盤	A-D4	SK18					ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	穿孔あり
92	64-4	陶器（京・信楽系）	鉢	A-D4	SK18	小片				ロクロナデか、施釉	密	やや良	素地:灰黄 釉色:灰黄	
93	63-1	土師器	火鉢	A-D4	SK18	2/12		16.4		ナデ、オサエ後工具ナデ	密	良	灰黄褐	
95	81-1	陶器（京・信楽系）	碗	A-E4	SK19	1/12	11.0			ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:淡黄	
96	81-5	陶器（京・信楽系）	皿か	A-E4	SK19	3/12		7.8		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:黒褐	
97	81-2	陶器（京・信楽系）	皿か	A-E4	SK19	2/12		8.6		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰黄 釉色:白	
98	79-5	土師器	有孔円盤	A-E4	SK19					ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい橙	穿孔あり
99	81-4	磁器	花瓶	A-E4	SK19	12/12		2.3		施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
102	21-4	土師器	皿	B-E10	SK24	3/12	7.2		1.2	ナデ、オサエ	やや密	良	にぶい橙	
103	68-5	土師器	皿	B-E10	SK24	3/12	7.0			ナデ	密	良	にぶい黄橙	
104	24-4	土師器	皿	B-E10	SK24	2/12	8.4			ナデ	密	良	にぶい黄橙	
105	30-2	土師器	皿	B-E10	SK24	3/12	8.0		1.2	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
106	70-6	土師器	皿	B-E10	SK24	3/12	8.4		1.4	ナデ、オサエ	やや密	良	浅黄橙	
107	14-5	土師器	皿	B-E10	SK24	2/12	8.2		1.4	ナデ	密	良	浅黄橙	
108	15-5	土師器	皿	B-E10	SK24	3/12	9.4		1.5	ナデ	密	良	浅黄橙	
109	7-3	土師器	皿	B-E10	SK24	2/12	10.0			ナデ、オサエ	やや密	良	にぶい橙	
110	1-3	土師器	皿	B-E10	SK24	2/12	10.0		1.6	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
111	70-5	土師器	皿	B-E10	SK24	3/12	8.8		1.5	ナデ、オサエ	やや密	良	にぶい橙	
112	11-1	土師器	皿	B-E10	SK24	4/12	8.9			ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
113	7-4	土師器	皿	B-E10	SK24	1/12			1.2	ナデ、オサエ	やや密	良	にぶい橙	
114	1-8	土師器	皿	B-E10	SK24	2/12	13.2		2.4	ナデ	密	良	にぶい黄橙	
115	3-1	土師器	皿	B-E10	SK24	3/12	12.2			ナデ	密	良	にぶい黄橙	
116	15-3	土師器	皿	B-E10	SK24	1/12	11.8		1.6	ナデ	密	良	にぶい橙	
117	70-4	土師器	皿	B-E10	SK24	2/12	12.0		1.7	ナデ、オサエ	やや密	良	外面:褐灰 内面:褐灰	
118	15-4	土師器	皿	B-E10	SK24	5/12	12.0		2.3	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
119	11-7	土師器	焙烙	B-E10	SK24	小片				ナデ、工具ナデ	密	良	にぶい橙	外面煤付着
120	70-2	土師器	焙烙	B-E10	SK24	小片				ヨコナデ、工具ナデ	やや密	良	橙	
121	70-3	土師器	焙烙	B-E10	SK24	小片				ヨコナデ、工具ナデ	やや密	良	にぶい橙	
122	68-4	土師器	焙烙	B-E10	SK24	小片				ヨコナデ	密	良	にぶい橙	
123	70-1	土師器	焙烙	B-E10	SK24	小片				ヨコナデ、工具ナデ	やや密	良	にぶい橙	
124	24-1	土師器	焙烙	B-E10	SK24	小片	48.4			ヨコナデ、工具ナデ	密	良	にぶい橙	
125	21-1	土師器	焙烙	B-E10	SK24	小片				ヨコナデ、工具ナデ	やや密	良	にぶい橙	
126	30-1	土師器	焙烙	B-E10	SK24	1/12	31.4			ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	
127	21-2	土師器	焙烙	B-E10	SK24	1/12	35.6			ヨコナデ、工具ナデ	やや密	良	にぶい橙	外面煤付着
128	1-1	土師器	焙烙	B-E10	SK24	1/12	37.4			ヨコナデ	密	良	にぶい褐	外面煤付着
129	14-3	土師器	焙烙	B-E10	SK24	小片	40.4			ヨコナデ	密	良	にぶい橙	
130	24-3	土師器	燈明皿	B-E10	SK24	3/12	8.4			ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	油煙1カ所
131	24-2	土師器	燈明皿	B-E10	SK24	6/12	9.0		1.4	ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	油煙痕3カ所
132	57-2	土師器	燈明皿	B-E10	SK24	7/12	8.8		1.8	ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	油煙痕多数
133	79-6	土師器	燈明皿	B-E10	SK24	1/12	11.8		2.1	ヨコナデ	密	良	灰黄褐	油煙痕多数
134	7-2	土師器	燈明皿	B-E10	SK24	2/12	11.6		2.1	ヨコナデ	やや密	良	浅黄橙	油煙痕多数
135	14-4	土師器	燈明皿	B-E10	SK24	2/12	10.4		1.5	ヨコナデ	密	良	浅黄橙	油煙痕多数
136	86-2	土師器	皿	T8	SK24	小片				ナデ	やや密	良	浅黄	墨書

第４表 遺物観察表②

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	部位残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
137	3-5	土師器	皿	8-E10	SK24	小片				ナデ	密	良	にぶい黄橙	墨書「森□」
138	6-3	土師器	皿	8-E10	SK24	小片				ナデ	密	良	にぶい黄橙	墨書
139	6-2	土師器	皿	8-E10	SK24	小片				ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	墨書
140	6-1	土師器	皿	8-E10	SK24	小片				ナデ	密	良	にぶい黄橙	墨書
141	21-5	土師器	大鉢	8-E10	SK24	1/12	17.0			ナデ	やや密	良	浅黄橙	
142	66-5	土師器	大鉢	8-E10	SK24	1/12	15.0			ナデ、ヨコナデ	密	良	外面:灰褐 内面:褐灰	体部穿孔あり
143	28-1	土師器	椀	8-E10	SK24	1/12	13.1			ロクロナデ	密	良	にぶい橙	
144	1-4	土師器	椀	8-E10	SK24	11/12		3.8		ロクロナデ	密	良	にぶい黄橙	
145	15-2	土師器	塩壺	8-E10	SK24	8/12	6.6			ナデ	密	良	橙	刻印「泉湊伊織」
146	39-1	瓦質土器	大鉢	8-E10	SK24	1/12	12.2			ナデ、オサエ、ケズリ、ミガキ	密	良	外面:暗灰 内面:灰白	体部穿孔あり
147	57-3	土師器	大鉢/風炉	8-E10	SK24	2/12		15.5		ナデ	密	良	にぶい黄橙	
148	87-1	土師器	大鉢/風炉	8-E10	SK24	9/12		17.0		ナデ、ロクロナデ、工具ナデ	密	良	浅黄	墨書「五□□八日　文□ 丙□□　時□　宝」
149	72-5	陶器（京・信楽系）	おろし皿	8-E10	SK24	1/12	10.6	4.9	2.3	ロクロナデ、ケズリ、施釉	密	良	素地:にぶい橙 釉色:にぶい黄橙	
150	29-4	陶器（京・信楽系）	皿	8-E10	SK24	5/12	8.0	4.8	2.0	ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰黄 釉色:灰	
151	3-2	陶器（京・信楽系）	皿	8-E10	SK24	5/12	10.4	5.0	2.5	ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	灰白	
152	28-3	陶器（京・信楽系）	鍋	8-E10	SK24	4/12		6.4		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
153	1-5	陶器（京・信楽系）	皿	8-E10	SK24	5/12	9.0	4.2	2.5	ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
154	24-7	陶器（京・信楽系）	猪口	8-F10	SK24	3/12	6.0	2.3	2.9	ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
155	35-6	陶器（京・信楽系）	仏飯器	T8	SK24	11/12		4.2		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
156	11-3	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24					ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:透明	
157	70-10	陶器（京・信楽系）	蓋	8-E10	SK24	8/12	5.4	4.0	1.6	施釉	密	良	素地:にぶい橙 釉色:暗赤褐	
158	22-5	陶器（京・信楽系）	蓋	8-E10	SK24	1/12	8.2			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
159	26-4	陶器（京・信楽系）	香炉	8-F10	SK24	3/12	8.4			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰オリーブ	
160	15-6	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24					施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
161	24-6	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	5/12		4.0		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:にぶい赤褐	
162	22-7	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	2/12	10.2			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
163	31-4	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	2/12	10.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白　暗灰黄	
164	31-2	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	1/12	9.9			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
165	16-5	陶器（京・信楽系）	蓋	8-E10	SK24		6.8		1.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
166	57-4	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	3/12	9.0	3.2	5.6	施釉	密	良	素地:浅黄 釉色:浅黄	
167	62-3	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	6/12		4.0		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
168	70-9	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	3/12	11.4			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
169	21-7	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	1/12	12.4			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
170	2-4 22-2	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	2/12	14.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
171	70-7	陶器（京・信楽系）	井戸茶碗	8-E10	SK24	11/12		5.4		施釉	密	良	素地:浅橙 釉色:灰白	
172	71-4	陶器（京・信楽系）	蓋	8-E10	SK24	1/12	10.0		2.0	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
173	22-1	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	1/12	13.2			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
174	9-7	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	2/12	12.2			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
175	25-5	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	2/12	12.3	4.2	4.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
176	11-2	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	3/12	12.5			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰黄	
177	9-5	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	12/12		3.7		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
178	3-8	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	5/12		4.6		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰オリーブ	
179	33-4	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	2/12	11.6			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
180	9-1	陶器（京・信楽系）	香炉か	8-E10	SK24	12/12		4.2		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
181	55-1	陶器（京・信楽系）	蓋	T8	SK24	2/12				施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
182	33-3	陶器（京・信楽系）	椀	8-F10	SK24	2/12	10.8			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
183	67-4	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	1/12	12.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
184	71-5	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	3/12	12.4			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
185	9-8	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	1/12	11.8			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
186	72-4	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	4/12		3.8		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
187	22-3	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	3/12	11.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
188	31-3	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	1/12	10.7			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
189	8-1	陶器（京・信楽系）	皿	8-E10	SK24	5/12		7.8		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
190	5-1	陶器（京・信楽系）	皿	8-E10	SK24	7/12		7.4		施釉	密	良	素地:浅黄 釉色:灰白	墨書「口丹」
191	8-2	陶器（京・信楽系）	皿	8-E10	SK24	4/12		5.2		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
192	4-2	陶器（京・信楽系）	椀	8-E10	SK24	12/12		5.0		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	底面（判読不能）
193	22-4	陶器（京・信楽系）	小型鍋か	8-E10	SK24	2/12	9.8			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:にぶい赤褐	

第５表 遺物観察表③

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	部位残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
195	9-6	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	5/12		5.8		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
196	5-2	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	8/12		5.7		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰	墨書「十」
197	4-3	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	12/12		3.7		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	墨書「十」
198	4-4	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	4/12		4.0		施釉	密	良	灰白	墨書「十」
199	4-5	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	12/12		3.8		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰黄	墨書「十」
200	21-6	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	11/12		3.2		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
201	6-4	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	5/12		4.0		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	墨書「森」
202	4-7	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	12/12		4.6		施釉	密	良	素地:浅黄 釉色:黄褐	墨書「〆三」
203	4-6	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	6/12		3.8		施釉	密	良	浅黄	墨書「△」
204	5-3	陶器（京・信楽系）	碗	8-E10	SK24	3/12		3.8		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	底面（判読不能）
205	16-4	陶器（肥前系）	蓋	8-E10	SK24	2/12	9.6		3.9	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明オリーブ灰	
206	57-1	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	3/12	10.6			施釉	密	良	素地:にぶい黄橙 釉色:にぶい黄褐	尾呂茶碗
207	81-5	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	12/12		4.8		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
208	9-3	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	5/12		5.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
209	71-3	陶器（肥前系）	蓋	8-E10	SK24	3/12	8.8		3.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
210	54-3	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	T8	SK24	1/12	11.6			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
211	3-3	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	12/12		5.8		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
212	7-8	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	4/12		5.2		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
213	51-4	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	10/12		5.2		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
214	66-2	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	1/12	12.5			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
215	54-4	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	T8	SK24	-				ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	外面煤付着
216	54-5	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	T8	SK24	3/12		6.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
217	51-3	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	12/12		4.2		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
218	66-1	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	12/12		5.5		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
219	92-2	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	2/12	13.2			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
220	3-7	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	9/12		5.6		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:オリーブ黄	
221	39-2	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	3/12	11.8	5.4	8.8	ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	外面煤付着
222	66-3	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	T8	SK24	12/12		4.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰オリーブ	墨書「楓」
223	26-6	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-F10	SK24	12/12		5.4		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰オリーブ	外面煤付着
224	7-9	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	9/12		5.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
225	9-4	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	5/12		4.4		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
226	66-4	陶器（瀬戸・美濃系）	天目茶碗	8-E10	SK24	9/12		4.2		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:黒褐	
227	24-5	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E11	SK24	4/12		4.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
228	6-5	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	8-E10	SK24	12/12		4.2		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	墨書「弓」
229	26-3	陶器（京・信楽系）	有耳壺	8-F10	SK24	4/12	10.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗褐	
230	68-2	陶器（京・信楽系）	土瓶	8-E10	SK24	1/12	9.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
231	70-8	陶器（京・信楽系）	瓶類か	8-E10	SK24	4/12		8.4		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	やや密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
232	7-6	陶器（京・信楽系）	瓶類か	8-E10	SK24	4/12		7.6		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	やや密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
233	1-2	陶器（京・信楽系）	土瓶	8-E10	SK24	小片	14.4			ロクロナデ、施釉、櫛描文	密	良	素地：浅黄橙 釉色：褐	
234	39-1	陶器（京・信楽系）	小型壺	8-E10	SK24	3/12	14.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:浅黄 釉色:黒褐	
235	7-7	陶器（京・信楽系）	瓶類か	8-E10	SK24	3/12		5.8		ロクロナデ、施釉	やや密	良	素地:浅黄橙 釉色:浅黄橙	
236	7-5	陶器（京・信楽系）	瓶類か	8-E10	SK24	5/12		7.8		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
237	3-4	陶器（京・信楽系）	瓶類か	8-E10	SK24	4/12		8.4		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:にぶい黄	
238	21-5	陶器（京・信楽系）	瓶類か	8-E10	SK24	2/12		9.8		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
239	1-6	陶器（京・信楽系）	水甕か	8-E10	SK24	3/12		8.4		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
240	9-2	陶器（京・信楽系）	水甕か	8-E10	SK24	4/12		8.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
241	5-4	陶器（京・信楽系）	瓶類か	8-E10	SK24	4/12		10.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:褐	墨書（判読不明）
242	10-3	陶器（京・信楽系）	鉢	8-E10	SK24	1/12	22.2			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:透明	
243	47-1	陶器（京・信楽系）	鉢	8-E10	SK24	3/12		12.8		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:黒褐	
244	1-7	陶器（瀬戸・美濃系）	鉢	8-E10	SK24	2/12	21.2			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:黄灰 施釉:灰黄	
245	26-1	陶器（瀬戸・美濃系）	鉢	8-E10	SK24	1/12	26.0			ロクロナデ、施釉、波状文	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
246	66-3	陶器（京・信楽系）	鉢	8-E10	SK24	1/12	33.8			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
247	86-1	陶器（京・信楽系）	鉢	8-E10	SK24	2/12	17.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	墨書「戌壬二月・・・」
248	91-2	陶器（京・信楽系）	擂鉢	8-E10	SK24	1/12	34.8			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤灰	
249	10-1	陶器（京・信楽系）	擂鉢	8-E10	SK24	2/12	34.8			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:浅黄橙 釉色:暗赤褐	すり目7本/2.1cm
250	14-1	陶器（京・信楽系）	擂鉢	8-E10	SK24	1/12	40.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤褐	すり目7本/2.7cm
251	14-2	陶器（京・信楽系）	擂鉢	8-E10	SK24	1/12	38.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤灰	すり目7本/2cm
252	40-1	陶器（京・信楽系）	擂鉢	8-E10	SK24	7/12		17.4		ロクロナデ、施釉	やや粗	やや良	素地:灰白 釉色:黒褐	

第６表　遺物観察表④

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	部位残存度	法量（cm）口径	底径	器高	技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
253	37-1	陶器（京・信楽系）	擂鉢	8-E10	SK24	5/12		14.6		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰赤	
254	15-1	陶器（京・信楽系）	甕	8-E10	SK24	1/12	25.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:にぶい赤褐	
255	27-1	陶器（京・信楽系）	甕	8-E10	SK24	2/12	30.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:にぶい赤褐	
256	39-4	陶器（京・信楽系）	甕	8-E10	SK24	小片				ロクロナデ、施釉	やや密	良	素地:灰白	
257	92-1	陶器（京・信楽系）	甕	8-E10	SK24	2/12	29.8			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	把手あり
258	91-1	陶器（京・信楽系）	甕	8-E10	SK24	1/12	41.4			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤灰	
259	17-4	磁器（肥前系）	仏飯具	8-E10	SK24	1/12	6.0	4.0	5.2	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
260	25-4	磁器（肥前系）	仏飯具	T8	SK24	5/12	5.8		5.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
261	16-1	磁器（肥前系）	仏飯具	8-E10	SK24	5/12	6.4			施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
262	9-9	磁器（肥前系）	蓋	8-E10	SK24	3/12	5.2	6.0	1.2	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
263	30-4	磁器（肥前系）	小坏	8-E10	SK24	11/12	6.2	2.8	2.5	施釉	密	良	素地:淡橙 釉色:灰白	
264	8-6	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	4/12	7.2	2.8	4.1	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
265	16-3	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	4/12	7.4		4.1	施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
266	23-3	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	2/12	5.4	2.2	3.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
267	55-5	磁器（肥前系）	筒形碗	T8	SK24	3/12	7.6			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
268	29-5	磁器（肥前系）	筒形碗	8-E10	SK24	2/12	7.8			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
269	68-1	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	3/12	7.2	3.3	4.7	施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
270	29-4	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	1/12	7.3	3.3		施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
271	30-3	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	9/12	7.5			施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
272	55-2	磁器（肥前系）	猪口	T8	SK24	小片	7.2	3.8	5.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
273	3-6	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	5/12	9.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
274	25-1	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	6/12	9.4			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
275	29-3	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	6/12		4.1		施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
276	69-1	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	7/12		4.0		施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
277	67-5	磁器（肥前系）	猪口	8-E10	SK24	9/12		6.0		施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
278	16-6	磁器（肥前系）	蓋	8-F11	SK25	3/12	9.8			施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
279	72-1	磁器（肥前系）	蓋	8-E10	SK24	6/12	10.0	4.0	2.9	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
280	23-4	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	6/12	8.7	3.2	5.2	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
281	16-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	2/12	9.6	4.2	5.6	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	青磁
282	29-1	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	1/12	10.0	4.0	4.7	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
283	67-1	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	4/12	4.0			施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
284	58-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	5/12	11.6	4.6	5.7	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	青磁
285	39-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	小片	11.0	4.2	5.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
286	11-5	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	6/12	10.5	4.0	5.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:透明	
287	2-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	12/12		4.0		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
288	57-5	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	2/12	9.6			施釉	密	良	素地:白 釉色:白	赤絵、金彩
289	2-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	3/12	10.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
290	72-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	2/12	9.7			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
291	25-3	磁器（肥前系）	染付碗	T8	SK24	4/12	5.4			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	釉色:飴色
292	2-5	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	2/12	10.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
293	23-5	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	2/12	9.8			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
294	22-8	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	12/12		3.6		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
295	67-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	2/12	10.2	3.7	5.1	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
296	67-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	4/12	10.0			施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
297	72-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	2/12	9.8	4.0	4.7	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
298	69-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	1/12	10.0	4.2	5.0	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
299	58-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	5/12	10.2	4.4	5.4	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
300	8-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	6/12		3.2		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
301	31-1	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	3/12	9.9	4.0	4.5	施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
302	8-4	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	4/12	11.8			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
303	23-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	2/12	12.6			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
304	10-4	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	6/12		3.6		施釉	密	良	素地:白 釉色:透明	
305	25-2	磁器（肥前系）	染付碗	T8	SK24	5/12		4.2		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
306	66-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	3/12	12.2			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
307	55-4	磁器（肥前系）	染付碗	T8	SK24	3/12		5.6		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
308	92-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	8/12		4.8		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
309	55-3	磁器（肥前系）	染付碗	T8	SK24	1/12	16.2			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	
310	22-6	磁器（肥前系）	染付碗	8-E10	SK24	8/12		4.6		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明緑灰	

第 7 表　遺物観察表⑤

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構	部位	法量 (cm)			技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（内面）	特記事項
							口径	底径	器高					
311	54-1	磁器（肥前系）	染付椀	T8	SK24	1/12		4.0		蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
312	9-5	磁器（肥前系）	染付椀	B-I10	SK24	1/12	11.4			蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：明緑灰	
313	30-2	磁器（肥前系）	染付椀	B-I10	SK24	3/12	13.8	5.5	7.5	蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
314	11-6	磁器（肥前系）	染付椀	B-I10	SK24	2/12	13.2	7.5	6.1	蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：オリーブ灰	
315	2-1	磁器（肥前系）	香炉	B-I10	SK24	2/12	8.4			蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
316	47-2	磁器（肥前系）	香炉	B-I10	SK24		11.9		5.15	蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：透明	
317	23-1	磁器（肥前系）	染付皿	B-I10	SK24	5/12	12.8	7.8	2.7	蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
318	71-2	磁器（肥前系）	染付皿	B-I10	SK24	4/12	13.8	8.0	3.3	蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
319	10-2	磁器（肥前系）	染付皿	B-I10	SK24	6/12	13.4	7.8	3.8	蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
320	29-2	磁器（肥前系）	染付皿	B-I10	SK24	4/12		8.0		蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：明緑灰	
321	30-5	磁器（肥前系）	染付皿	B-I10	SK24	2/12	12.5			蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：明緑灰	
322	68-1	磁器（肥前系）	青磁皿	B-I10	SK24	2/12	16.2	10.4	2.9	蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：明緑灰	
323	71-1	磁器（肥前系）	染付皿	B-I10	SK24	2/12	20.6			蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
324	54-2	磁器（肥前系）	染付皿	T8	SK24	1/12		8.4		蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
325	3-5	磁器（肥前系）	蓋	B-I10	SK24	12/12				蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：灰白	
326	13-5	磁器（肥前系）	有蓋壺	B-I10	SK24	6/12	7.6		10.05	蛸唐	密	良	素地：灰白 釉色：白	
364	68-4	上師器	皿	B-F11	SK25	4/12	6.4		1.5	ナデ、オサエ	密	良	橙	
365	68-2	上師器	皿	B-F11	SK25	5/12	6.5		1.6	ナデ	密	良	にぶい黄橙	
366	32-9	上師器	皿	B-F11	SK25	3/12	7.8			ナデ、工具ナデ、オサエ	やや粗	良	浅黄橙	
367	12-6	上師器	皿	B-F11	SK25	2/12	7.2			ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
368	32-8	上師器	皿	B-F11	SK25	2/12	7.8			ナデ、オサエ	やや粗	良	浅黄橙	
369	12-5	上師器	皿	B-F11	SK25	3/12	8.8			ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
370	74-1	上師器	皿	B-F11	SK25	3/12	9.0		1.3	ナデ	密	良	にぶい黄橙	
371	73-7	上師器	皿	B-F11	SK25	7/12	8.7		1.6	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
372	73-8	上師器	皿	B-F11	SK25	6/12	7.9		1.8	ナデ	密	良	にぶい黄橙	
373	74-5	上師器	皿	B-F11	SK25					ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
374	73-6	上師器	皿	B-F11	SK25	10/12	8.4		1.6	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
375	12-3	上師器	燈明皿	B-F11	SK25	2/12	8.8	6.4	1.15	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	底煤痕
376	74-3	上師器	燈明皿	B-F11	SK25	4/12	10.0			ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	底煤痕
377	12-4	上師器	燈明皿	B-F11	SK25	2/12	8.8	6.2	1.15	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	底煤痕
378	80-4	上師器	皿	B-F11	SK25	2/12	10.0		1.5	ナデ、オサエ	密	良	灰黄	
379	84-1	上師器	皿	B-F11	SK25	1/12	9.6		1.6	ナデ、オサエ	密	良	灰白	
380	32-7	上師器	皿	B-F11	SK25	1/12	10.0		1.3	ナデ、オサエ	やや粗	良	にぶい橙	
381	12-7	上師器	皿	B-F11	SK25	3/12	8.9			ナデ、オサエ	密	良	明褐灰～橙	
382	32-5	上師器	皿	B-F11	SK25	2/12	9.8		1.3	ナデ、オサエ	やや粗	良	にぶい橙	
383	32-6	上師器	皿	B-F11	SK25	2/12	10.0		1.1	ナデ、オサエ	やや粗	良	にぶい黄橙	
384	74-2	上師器	皿	B-F11	SK25	4/12	8.8		1.9	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
385	74-4	上師器	皿	B-F11	SK25	3/12	8.8			ナデ、オサエ	密	良	にぶい橙	
386	73-4	上師器	皿	B-F11	SK25	12/12	9.1		1.7	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
387	73-5	上師器	皿	B-F11	SK25	12/12	9.4		1.9	ナデ、オサエ	密	良	にぶい橙	
388	80-1	上師器	皿	B-F11	SK25	1/12	13.9		1.7	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	
389	83-5	上師器	燈明皿	B-F11	SK25	2/12	10.8		1.8	ナデ、オサエ	密	良	にぶい橙	底煤痕
390	74-6	上師器	燈明皿	B-F11	SK25	4/12	11.5		1.8	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	底煤痕
391	74-7	上師器	燈明皿	B-F11	SK25	2/12	13.4			ナデ、オサエ	密	良	灰黄褐	底煤痕
392	88-5	上師器	坩堝	B-F11	SK25	小片				ヨコナデ、工具ナデ、ケズリ	密		にぶい黄橙	煤付着
393	50-1	上師器	坩堝	B-F11	SK25	小片				ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	
394	50-2	上師器	坩堝	B-F11	SK25	小片				ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙	
395	12-1	上師器	坩堝	B-F11	SK25	小片				ヨコナデ	密		にぶい褐	煤付着
396	61-3	上師器	坩堝	B-F11	SK25	小片				ナデ、ヨコナデ、工具ナデ	密		にぶい橙	
397	61-4	上師器	坩堝	B-F11	SK25	小片				ナデ、ヨコナデ、工具ナデ	密		にぶい橙	
398	19-4	上師器	坩堝	B-F11	SK25	1/12	30.0			ヨコナデ、工具ナデ	密	良	にぶい黄橙	
399	32-4	上師器	坩堝	B-F11	SK25	1/12	31.8			ナデ、ヨコナデ、工具ナデ、ケズリ	やや粗		にぶい橙	
400	32-3	上師器	坩堝	B-F11	SK25	1/12	36.6			ナデ、工具ナデ、ケズリ	やや粗		にぶい橙	
401	12-2	上師器	坩堝	B-F11	SK24	1/12	38.0			ヨコナデ、ケズリ	密		にぶい褐	
402	32-2	上師器	坩堝	B-F11	SK25	1/12	38.0			ヨコナデ、工具ナデ、ケズリ	やや粗		にぶい橙	
403	49-3	上師器	坩堝	B-F11	SK25	1/12	40.0			ナデ、ヨコナデ、工具ナデ	密	良	にぶい黄橙	
404	84-1	上師器	坩堝	B-F11	SK25	1/12	41.8			ナデ、ヨコナデ	密		にぶい黄橙	
405	32-1	上師器	坩堝	B-F11	SK25	1/12	41.4			ナデ、ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗		にぶい橙	

第８表　遺物観察表⑥

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	部位残存度	法量（cm）			技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
							口径	底径	器高					
408	51-2	陶器 （京・信楽系）	蓋物	8-F11	SK25	3/12	4.8	2.4	2.6	ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
409	50-3	陶器 （京・信楽系）	灯火具	8-F11	SK25	3/12		5.6		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
410	75-1	陶器 （京・信楽系）	灯明皿	8-F11	SK25	12/12	8.8		1.7	ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:にぶい橙 釉色:にぶい赤褐	
411	13-2	陶器 （京・信楽系）	灯明皿	8-F11	SK25	3/12	11.0	4.2	2.0	ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰オリーブ	煤付着
412	23-6	陶器 （京・信楽系）	碗	8-F11	SK25	2/12	7.0			ロクロナデ、ロクロナデ後施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
413	89-2	陶器 （京・信楽系）	碗	8-F11	SK25	1/12	10.0			ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:黒	
414	26-5	陶器 （京・信楽系）	碗	8-F11	SK25	2/12	10.2	3.1	5.2	ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰オリーブ	
415	89-3	陶器 （京・信楽系）	碗	8-F11	SK25	5/12		2.2		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:	
416	52-2	陶器 （京・信楽系）	碗	8-F11	SK25	2/12		4.0		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
417	88-3	陶器 （京・信楽系）	碗	8-F11	SK25	2/12	10.8			ロクロナデ、ヘラケズリ	密	良	淡黄	
418	51-6	陶器 （京・信楽系）	染付碗	8-F11	SK25	1/12	9.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰オリーブ	
419	89-4	陶器 （京・信楽系）	染付碗	8-F11	SK25	4/12		5.0		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:明オリーブ灰	
420	6-7	陶器 （京・信楽系）	碗	8-F11	SK25	12/12		3.7		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:黒褐	墨書（判読不能）
421	89-7	陶器 （京・信楽系）	蓋	8-F11	SK25					施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰黄	
422	33-2	陶器 （京・信楽系）	蓋	8-F11	SK25	2/12	11.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
423	75-7	陶器 （京・信楽系）	蓋	8-F11	SK25	1/12	12.6			施釉	密	良	素地:にぶい黄橙 釉色:灰白	
424	20-2	陶器 （京・信楽系）	染付碗	8-F11	SK25	7/12		4.2		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰黄	
425	62-1	陶器 （京・信楽系）	染付碗	8-F11	SK25	4/12	12.2			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:浅黄	
426	32-3	陶器 （京・信楽系）	染付碗	8-F11	SK25	12/12		3.6		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
427	88-6	陶器 （瀬戸・美濃系）	碗	8-F11	SK25	4/12		7.6		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
428	26-2	陶器 （瀬戸・美濃系）	碗	8-F11	SK25	11/12		6.0		ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰オリーブ	
429	18-3	陶器 （瀬戸・美濃系）	碗	8-F11	SK25	4/12		5.4		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
430	75-5	陶器 （瀬戸・美濃系）	碗	8-F11	SK25	5/12		5.2		ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
431	18-2	陶器 （瀬戸・美濃系）	皿	8-F11	SK25	5/12	14.0	8.0	3.1	ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	底部糸切り痕
432	18-1	陶器 （瀬戸・美濃系）	鉢	8-F11	SK25	4/12	21.8	7.2	6.8	ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	底部糸切り痕
433	90-7	陶器 （肥前系）	鉢	8-F11	SK25	1/12	35.2			ロクロケズリ、施釉、陰刻文、象嵌	密	良	素地:にぶい赤褐 釉色:にぶい黄褐	三島手
434	88-7	陶器 （京・信楽系）	甕	8-F11	SK25	1/12	15.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰褐	
435	50-4	陶器 （京・信楽系）	鉢	8-F11	SK25	2/12	36.0			ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	外面に漆のような付着物あり
436	50-5	陶器 （京・信楽系）	甕	8-F11	SK25	1/12	29.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗褐	
437	33-1	陶器 （京・信楽系）	水差	8-F11	SK25	1/12	17.4			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
438	46-2	陶器 （京・信楽系）	水差	8-F11	SK25	9/12	16.4	12.3	9.35	ロクロナデ、施釉	密	良	素地:浅黄橙	
439	19-2	陶器 （京・信楽系）	甕	8-F11	SK25	2/12	26.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
440	59-2	陶器 （京・信楽系）	水差か	8-F11	SK25	3/12		12.2		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:黒褐	
441	35-1	陶器 （京・信楽系）	甕	8-F11	SK25	1/12	55.2			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:にぶい黄褐	
442	60-4	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25					ロクロナデ、施釉	密	良	素地:にぶい橙 釉色:暗赤褐	すり目摩滅
443	60-1	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25					ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰赤	すり目9本/2.5cm
444	60-3	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25					ロクロナデ、施釉	密	良	素地:橙 釉色:暗赤褐	すり目10本/1.8cm
445	61-1	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	1/12	26.0			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤褐	
446	89-1	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	2/12	29.6			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤褐	すり目9本/2.5cm
447	13-3	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	1/12	33.5			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:さび釉	すり目7本/1.7cm
448	59-3	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	1/12	34.8			ロクロナデ、施釉	密	良	素地:にぶい褐 釉色:黒褐	すり目7本/2cm
449	60-2	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	1/12		17.5		ロクロナデ	密	良	にぶい橙	すり目摩滅
450	59-1	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	3/12		15.4		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:暗赤褐	すり目5本/2cm
451	19-1	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	5/12		16.2		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:にぶい赤褐	
452	46-1	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	3/12		14.2		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:赤褐	櫛目6本/2.4cm
453	20-1	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	5/12		17.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:赤灰	
454	36-1	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	3/12		17.4		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:にぶい黄橙 釉色:灰黄	すり目12本/2.0cm
455	36-2	陶器 （京・信楽系）	擂鉢	8-F11	SK25	3/12		20.4		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:浅黄橙 釉色:黒褐	すり目9本/1.7cm
456	89-8	磁器（肥前系）	仏飯具	8-F11	SK25	2/12	6.0	3.8	5.7	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
457	75-4	磁器（肥前系）	小皿	8-F11	SK25	1/12	6.4	2.2	2.6	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
458	75-6	磁器（肥前系）	蓋	8-F11	SK25	3/12	6.6			施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
459	89-6	磁器（肥前系）	猪口	8-F11	SK25	1/12	7.7	3.0	4.7	施釉、内外面陰刻	密	良	白	
460	33-6	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	5/12		3.2		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
461	13-1	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	1/12	13.8			ロクロナデ、施釉、染付	密	良	素地:灰白 釉色:透明	
462	75-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	1/12	14.4			施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
463	17-1	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	3/12		6.0		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
464	19-4	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	1/12	9.7	4.0	4.7	施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
465	85-4	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	2/12	10.0			施釉	密	良	素地:白 釉色:白	

第９表 遺物観察表⑦

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	部位残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
466	52-5	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	3/12	10.2			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
467	62-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	3/12	9.2	4.2	4.8	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
468	90-5	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	4/12	10.5			施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
469	90-6	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	1/12	10.0	6.8	4.2	施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
470	89-5	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	1/12	9.8	3.8	5.6	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
471	17-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	12/12		4.0		施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
472	90-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	小片		4.0		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
473	20-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	1/12	10.6	4.3	5.5	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
474	33-5	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	2/12	10.2	4.1	4.8	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
475	90-4	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	1/12	10.4	4.4	4.7	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
476	75-3	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	3/12		4.0		施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
477	52-1	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	4/12		3.8		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	赤絵
478	13-4	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	2/12	14.8			施釉	密	良	素地:白 釉色:透明	
479	52-4	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	3/12		6.0		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
480	90-2	磁器（肥前系）	染付碗	8-F11	SK25	8/12		3.8		施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
481	90-1	磁器（肥前系）	染付皿	8-F11	SK25	1/12	13.0	7.2	3.5	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
482	6-6	磁器（肥前系）	徳利か	8-E10	SK25	12/12		10.0		施釉	密	良	素地:白 釉色:白	墨書「貮?拾六年□□□」
499	79-7	土師器	焙烙	8-F10	SK26					ヨコナデ	密	良	にぶい褐	煤付着
500	73-3	土師器	皿	8-F10	SK27					ナデ	密	良	にぶい黄橙	
501	73-2	土師器	皿	8-F10	SK27	4/12	9.8		1.5	ナデ、オサエ、線刻	密	良	にぶい橙	
503	73-1	土師器	火鉢か	8-D8	SK28	2/12	18.5			ナデ、ケズリ	密		にぶい橙	煤付着
504	81-6	陶器（京・信楽系）	燈明皿	8-D11	SK29	5/12	4.6		1.4	ロクロナデ	密	良	灰白	
505	81-5	磁器（瀬戸・美濃系）	染付碗	8-D11	SK29	4/12	9.0			施釉	密	良	白	
506	53-4	陶器（瀬戸・美濃系）	碗	A-D1	SD5	2/12	7.2			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
507	53-3	磁器（肥前系）	染付碗	A-D1	SD5					施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
508	56-1	陶器（京・信楽系）	壺か	A-D1	SD5					ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:褐	
509	56-2	陶器（京・信楽系）	擂鉢	A-D1	SD5	1/12		18.0		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:にぶい黄橙 釉色:にぶい褐	すり目10本/2.6cm
512	56-3	土師器	皿	A-C2	SD6						密	良	灰黄	
513	56-4	磁器（肥前系）	染付碗	A-G5	SD13					施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
514	45-4	磁器（肥前系）	染付碗	B-E8	SD34	7/12		4.8		施釉	密	良	素地:白 釉色:灰白	
515	53-8	陶器（京・信楽系）	碗	A-F2	SZ9	2/12				ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
516	53-7	陶器（京・信楽系）	鍋	A-E1	SZ8	1/12		8.8		ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
517	43-7	土師器	皿	B-C8	P2					ナデ	密	良	浅黄橙	
518	44-3	陶器（京・信楽系）	小碗	B-C9	P1	3/12	9.0	5.3	4.0	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
519	44-2	陶器（京・信楽系）	急須	B-C8	P1					施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
520	44-1	陶器（京・信楽系）	行平鍋	B-B8	P2	4/12	20.4	7.6	11.7	施釉	密	良	素地:浅黄橙 釉色:浅黄	煤付着
521	45-1	磁器	染付皿	B-C11	P2	4/12		7.0		施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
522	44-4	磁器（瀬戸・美濃系）	染付碗	B-C11	P1	3/12	11.9	4.2	4.9	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
523	44-6	磁器（瀬戸・美濃系）	猪口	B-C11	P2	1/12	8.6	3.6	4.5	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
524	44-5	磁器（瀬戸・美濃系）	猪口	B-C11	P2	5/12	8.0	3.6	4.8	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
525	45-3	磁器（瀬戸・美濃系）	蓋	B-D8	P1	4/12	5.8			施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
526	43-6	磁器（瀬戸・美濃系）	湯呑茶碗	B-B8	P2	5/12	6.6	3.3	6.8	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
527	43-4	磁器（瀬戸・美濃系）	湯呑茶碗	B-B8	P2	3/12	7.2	3.9	6.9	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
528	45-2	磁器（瀬戸・美濃系）	湯呑茶碗	B-D8	P1	3/12	7.0	2.9	7.4	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
529	64-6	陶器（京・信楽系）	蓋	A-D7	包含層	1/12	14.0			ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉	密	良	素地:淡黄 釉色:灰白	
530	64-5	陶器（瀬戸・美濃系）	皿	B-E8	包含層	1/12	10.0	5.0	2.0	ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 釉色:にぶい黄褐	
531	65-5	磁器（肥前系）	染付皿	A-C2	包含層	1/12	7.8	4.5	1.9	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
532	65-3	磁器（肥前系）	染付碗	A-E4	包含層	1/12	9.2			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
533	65-4	磁器（肥前系）	染付碗	A-D1	包含層	小片	9.0			施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
534	43-5	磁器（瀬戸・美濃系）	香炉	B-B8	P2	4/12	9.2	6.2	8.5	施釉	密	良	素地:白 釉色:明緑灰	
535	92-4	磁器（瀬戸・美濃系）	碗	AIC	表土	10/12	11.2	3.8	6.1	施釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	
536	65-1	磁器（肥前系）	染付皿	A-C4	包含層	1/12	16.0	10.0	4.8	施釉、無釉	密	良	素地:灰白 釉色:灰白	破断面に付着物（漆か）
537	56-7	磁器（瀬戸・美濃系）	碗	AIC	表土	1/12	10.9	3.8	6.1	施釉	密	良	素地:白 釉色:白	
538	56-5	磁器（瀬戸・美濃系）	碗	AIC	表土	7/12		3.9		施釉	密	良	素地:白 釉色:白	銘「品148」（統制番号）

第10 表 遺物観察表⑧

No	遺物番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	法量（cm）			技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
						口径	底径	器高					
15	93-2	瓦	桶込瓦	A-C5	SK3	-	3.8	7.0	ナデ	密	良	暗灰	巴文
22	93-1	瓦	軒丸瓦	A-C5	SK3	-	-	-	ナデ、ケズリ、面取り	密	良	暗灰	巴文
23	120-3	瓦	軒丸瓦	A-C5	SK3			15.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ、	密	良	暗灰	巴文
24	90-1	瓦	丸瓦	A-C5	SK3				ナデ、ケズリ、面取り、布目	密	良	灰	
25	102-1	瓦	丸瓦	A-C5	SK3		13.8		ナデ、面取り	密	良	オリーブ黒	
26	99-2	瓦	丸瓦	A-C5	SK3		10.2		ナデ、ケズリ、面取り、布目	密	良	灰	彩花あり
28	100-1	瓦	桶瓦	A-C5	SK3	20.8	24.2			密	良	暗灰	彩花あり
72	93-4	瓦	軒丸瓦	A-D6	SK12		4.8	7.5	ナデ、工具ナデ	密	良	暗灰	巴文
73	99-1	瓦	軒丸瓦	A-D6	SK12			11.0	ナデ、ケズリ	密	良	灰	巴文、五当面に種か砂
74	93-5	瓦	軒丸瓦	A-D6	SK12			16.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	巴文
75	99-2	瓦	軒平瓦	A-D6	SK12				ナデ、ケズリ、面取り	密	良	灰	巴文
76	94-1	瓦	丸瓦	A-D6	SK12	26.0			ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り、布目	密	良	灰	
77	117-1	瓦	桶瓦	A-D6	SK12				ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	灰	
81	97-1	瓦	丸瓦	A-D6	SK12				ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り、布目	密	良	灰	
84	79-1	瓦	軒丸瓦	A-D5	SK18				ナデ、ヨコナデ、	密	良	灰	蕨餅文あるいは菊文
101	101-4	瓦	軒丸瓦	A-E3	SK19			11.3	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	巴文
327	106-2	瓦	桶込瓦	B-E10	SK24			7.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	暗灰	巴文
328	101-3	瓦	軒丸瓦	B-F10	SK24			11.5	ナデ、工具ナデ、面取り	密	良	暗灰	巴文、田面に木目残存
329	113-1	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			12.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	灰	巴文
330	113-3	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			10.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	巴文
331	101-2	瓦	軒丸瓦	B-F10	SK24			11.5	ナデ、工具ナデ、面取り	密	良	灰	巴文
332	111-3	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			6.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	巴文
333	108-1	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			13.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	暗灰	巴文
334	109-2	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			16.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	巴文
335	117-2	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			12.0	ナデ、ヨコナデ、ケズリ	密	良	灰	巴文
336	104-2	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			12.2	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	巴文
337	103-3	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			13.0	ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	巴文
338	113-4	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			11.0	ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	巴文
339	103-2	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24				ナデ、工具ナデ	密	良	暗灰	巴文
340	109-4	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24		1.6	11.6	ナデ、ケズリ、面取り	密	良	灰	巴文
341	113-2	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			12.0	ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	巴文
342	111-2	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			9.2	ナデ、工具ナデ、面取り、ケズリ	密	良	暗灰	巴文
343	114-1	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK25			9.3	ナデ、工具ナデ、面取り、ケズリ	密	良	灰	巴文
344	102-2	瓦	軒丸瓦	B-F10	SK24			12.5	ナデ、面取り	密	良	灰	巴文
345	111-2	瓦	桶瓦	B-E10	SK24			10.8	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	片鬼文
346	111-1	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			11.3	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	巴文
347	110-2	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			12.5	ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	灰	巴文
348	112-2	瓦	桶瓦	B-E10	SK24			10.5	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	片鬼文、保付着
349	110-1	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24			15.5	ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	暗灰	巴文
350	106-3	瓦	軒丸瓦	B-E10	SK24		1.4	10.0	ナデ、ケズリ	密	良	黒	片鬼文
351	111-3	瓦	軒平瓦	B-E10	SK24				ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	
352	114-4	瓦	軒平瓦	B-E10	SK24				ナデ、工具ナデヲ、ケズリ	密	良	暗灰	
353	112-1	瓦	軒平瓦	B-E10	SK24				ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	灰	
354	103-1	瓦	軒平瓦	B-E10	SK24				ナデ、工具ナデ、ケズリ、矢けあり	密	良	灰	
355	108-1	瓦	軒平瓦	B-E10	SK24	17.3	12.4		ナデ、ケズリ、面取り、接合痕有	密	良	黒	木目しあり
356	106-1	瓦	丸瓦	B-E10	SK24	21.1		11.7	工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	
357	109-1	瓦	丸瓦	B-E10	SK24	8.6	1.3		ケズリ、面取り	密	良	暗灰	
358	105-1	瓦	丸瓦	B-E10	SK24			15.1	工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	
359	107-1	瓦	平瓦	B-E10	SK24	21.8	18.0		ナデ、ケズリ、面取り	密	良	オリーブ黒	
385	115-3	瓦	軒丸瓦	B-F11	SK25			10.0	ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	
484	123-1	瓦	軒丸瓦	B-F11	SK25				ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	灰、灰白	
485	115-1	瓦	軒平瓦	B-F11	SK25				ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	
486	115-2	瓦	軒平瓦	B-F11	SK25				ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	
487	96-1	瓦	軒丸瓦	B-F11	SK25			18.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	
488	120-1	瓦	軒丸瓦	B-F11	SK25			12.0	ナデ、工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	暗灰	
489	120-2	瓦	軒丸瓦	B-F11	SK25			15.0	ナデ、ケズリ	密	良	灰	
490	122-2	瓦	丸瓦	B-F11	SK25				工具ナデ、ケズリ	密	良	暗灰	
491	123-1	瓦	丸瓦	B-F11	SK25				工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	灰	

第11 表 遺物観察表⑨（瓦）

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	法量（cm）			技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面）	特記事項
						口径	底径	器高					
492	124-1	瓦	丸瓦	B-F11	SK25				工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	
493	110-1	瓦	丸瓦	B-F11	SK25	25.0	14.5		ケズリ、面取り	密	良	灰	
494	95-1	瓦	丸瓦	B-F11	SK25				工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	釘孔あり
495	119-2	瓦	丸瓦	B-F11	SK25	10.2	12.1		ケズリ、面取り	密	良	灰	釘孔あり
496	119-1	瓦	丸瓦	B-F11	SK25	16.4	13.9		工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	灰	
497	116-1	瓦	丸瓦	B-F11	SK25				工具ナデ、ケズリ、面取り	密	良	暗灰	釘孔あり
498	122-1	瓦	平瓦	B-F11	SK25				工具ナデ、面取り	密	良	暗灰	
502	48-1	瓦	鬼瓦	B-D8	SK29	23.6			ナデ	密	良	灰	
510	105-2	瓦	軒丸瓦	A-D5	SD5				ナデ、工具ナデ	密	良	灰	
511	93-3	瓦	軒平瓦	A-D5	SD5				ナデ、ケズリ、面取り	密	良	暗灰	
539	126-1	瓦	枝瓦か	—	T16				ナデ、面取り	密	良	灰	「尾張 ○圧 特製」刻印あり
540	125-1	瓦	枝瓦か	—	T16	29.4	25.0		ナデ、面取り	密	良	灰	
541	109-3	瓦	軒丸瓦	A区	表土			11.0	工具ナデ、ケズリ	密	良	灰	巴文

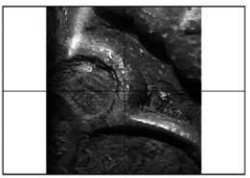
第11 表 遺物観察表⑨（瓦）

No	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	遺構層位	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
						口径	底径	器高		
78	53-3	金属製品	電水通室	A-D5	SK12	2.6	2.6	0.2		
79	34-5	石製品	碁石	A-D5	SK12	2.2	2.2	0.4	黒	
80	77-7	磁器製品	碁子か	A-D5	SK12	3.0	2.5		白	
98	53-9	金属製品	金具	T3	SK19	7.6	5.0	0.5		
360	27-3	石製品	硯	B-E10	SK24	10.1	7.0	1.0	灰	重量124g
361	28-2	石製品	硯	B-E10	SK24	9.0	5.5	0.8	暗オリーブ灰	重量69g
362	27-2	石製品	硯石	B-E10	SK24	14.0	4.2	1.4	浅黄橙	重量114g
363	53-6	金属製品	電水通室	B-E10	SK24	2.4	2.4	0.1		
406	6-6	土製品	土人形	B-F11	SK25	3.8	3.1	1.0	仁ぶい橙	
407	74-8	土製品	土人形	B-F11	SK25				仁ぶい橙	

第12 表 遺物観察表⑩（その他）

測定装置	SEA1200VX
測定時間（秒）	30
有効時間（秒）	30
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.0mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	1000
フィルタ	内用
マイラー	ホバー
ビーキング	1.0mm
タイム	-

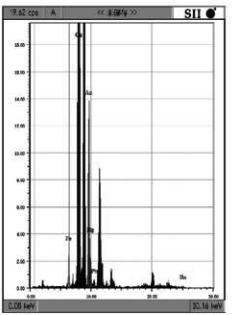
測定条件



試料写真

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	Ka	27.418	6.23 - 6.57
29	Cu	銅	Ka	2541.34	7.86 - 8.23
50	Sn	スズ	Ka	1.52	24.91-25.47
79	Au	金	Lu	143.304	9.51 - 9.90
80	Hg	水銀	Lu	53.187	9.79-10.18
82	Pb	鉛	Lu	6.813	10.34-10.74

測定結果



スペクトル

第13 表 蛍光X線分析結果（100）

V 総 括

上野城跡第15次調査は、上野城外堀の内側、藤堂玄蕃屋敷跡の一角を調査したものである。発掘調査は津地家裁伊賀支部の敷地内にあたるが、上野城跡および藤堂玄蕃屋敷に関係する可能性のある遺構や遺物が確認できた。ここでは、絵図などから読み取れる藤堂玄蕃屋敷の様相を整理したうえで、今回の調査結果を検討し、今後の課題についてまとめる。

1 藤堂玄蕃屋敷と遺構の関係

a 絵図から

まずは藤堂玄蕃屋敷の変遷を確認する[1]。寛永年間の藤堂玄蕃屋敷は、本丸の東南角の敷地一所であったが、元禄年間に至ると、かつての堂嶋又兵衛の屋敷を吸収し、北に面する一角の一部も占めるようになっている。この状況は文化年間以降の絵図でも確認できる[2]。つまり、藤堂玄蕃屋敷は江戸時代を通じ城内の同じ位置を占め、17世紀末頃に拡大するといえる。また、明治3年の絵図において、同位置には「藤堂玄蕃」ではなく「玄造」の表記がある。この「玄造」は藤堂玄蕃家十二代当主藤堂良忠と思われる。明治6年の廃城令に伴い、藤堂藩では城郭の処分を行うとともに、家臣に対しては武家屋敷の返還を求めた。入用を求める家臣には、住居の下げ渡しも認められたが、玄蕃家はこれを選択せず、敷地は明治９年11月には上野区裁判所として利用されることとなった[3]。

藤堂玄蕃家は、上野城で城代（藤堂采女家）に次ぐ地位であった。藤堂玄蕃家と同じく5,000石を給された藤堂新七郎家のみが、江戸時代を通じて同じ位置に屋敷を構えている状況が確認できる。藤堂家の有力家臣であっても、同一地点に屋敷を構え続けることは、そう容易いことではなかったことがここから分かる。江戸時代を通して、藤堂玄蕃屋敷は南側、すなわち東大手門側が正面であったと考えられ、このことについてはｂにて詳述する。

b 屋敷表門付近の状況

屋敷表門付近の状況がわかる絵図として、天保年間のものがある[4]。これを見ると、東大手門側の坂井帯刀家をはじめとした北向きの屋敷列は、その北面に水路状の施設があり、渡り橋と思しき表現でつながれている。他方、藤堂玄蕃屋敷をはじめとした西向きの屋敷列にも西側に同様の水路上の施設が確認でき、敷地のおおよそ中央に渡り橋が描かれている。ただし、藤堂玄蕃屋敷においてはその渡り橋の表現が描かれていない。このことから、藤堂玄蕃屋敷の表門は絵図に描かれていない部分に存在していることが考えられる。また、西大手門側の御講堂における渡り橋の表記を見ると、絵図における各屋敷の主の表記に相対するように渡り橋が描かれていることから、藤堂玄蕃屋敷は文字表記や現存する座敷図から類推すると南側、すなわち東大手門側の絵図では描かれていない位置に表門があったのではないかと考えられる。

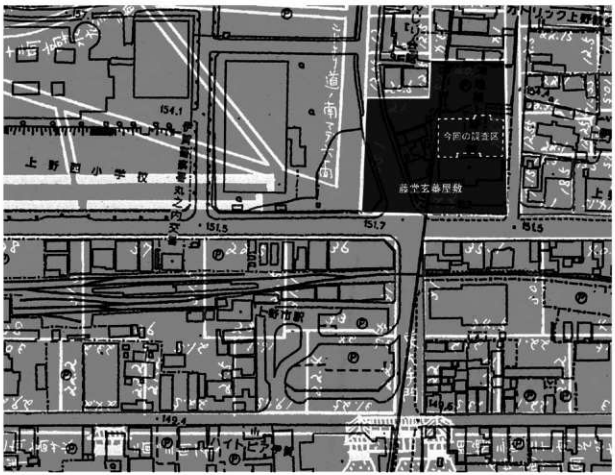
c 現況比定と調査区の位置関係

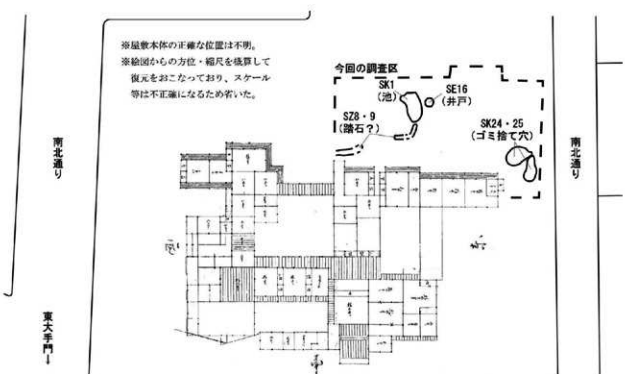
近世の上野城下絵図に描かれた屋敷地や地割と、現況地割との関係については、福井健二氏が調査し公表している[5]。第35図はそれを基に現況地割と合わせて示したものである。藤堂玄蕃屋敷は国道163号線に面し、丸之内交差点をやや含みながら、北に向かう鍵状の土地となる。屋敷地の寸法は、東西77m、南北西面63m、南北東面86mほどとなり、面積を概算すれば、およそ1,490坪の屋敷地ということになる。（佐藤）

d 調査成果と屋敷地の関係

上野城跡第15次調査区は、江戸時代の上野城との関係でみると第35図のような位置関係になる。第15次調査区は、藤堂玄蕃屋敷地のうち、やや北寄り、ということになる。この位置関係を基に、検出した遺構の性格について検討する。

庭園との関連 表屋敷の北側にあたる今回の調査区では、柱跡など建物の痕跡を示す遺構がほとんど見つからなかった。一方で、池や井戸、踏み石（あるいは石組暗渠）などといった庭園に関連する遺構が多く確認された。17世紀末から18世紀の遺物がまとまって出土した大型廃棄土坑もみられ、今回の調査





第35図　絵図からみた藤堂玄蕃屋敷と検出遺構の位置関係（福井2010をもとに作成）

区は、藤堂玄蕃屋敷に付随する庭園と重なる可能性が高い。

ＳＺ10について　ＳＺ10は幅約70～85cm、残存長15mの石敷遺構である。北側は現代の攪乱によって欠損しているが、東端では北側へ直角に曲がることがわかる。敷石の上面は平滑にならず、基盤層直上に石材を据えていることから、踏み石や石組暗渠としての機能は考えにくい。築地塀の基礎の可能性が考えられるが、遺構の位置関係から見て、屋敷本体の建物と庭園とを区切る形となり、この位置に塀を作る意図については検討が必要である。石材の間からはレンガが出土した箇所もあり、混入の可能性もあるが、以上の状況を鑑み、近代以降の裁判所に伴う遺構と考えるのが妥当である。

ＳＫ18・19について　底に板石が敷き詰められたＳＫ18と土坑内にほぞ組みされた木材を設置したＳＫ19については、貯井戸とこれに伴う釣瓶の基礎の可能性がある[9]。両遺構とも土師質の有孔円盤が出土する点や、方位に沿って両遺構が並ぶ点を鑑みると、これらが同時併存したことが想定され、前述のような機能が復元できる。出土した有孔円盤については、井戸の使用あるいは廃絶に伴う祭祀などで使用されたものと考えられる。なお、木材が番線で固定されていた点や、埋土には近代遺物も含まれることから確実に藤堂玄蕃屋敷の庭園に伴うかは判断できないが、出土した京・信楽系陶器からは18世紀後半以降に廃絶したと推測できる。

2　出土遺物の検討

a　近世の遺物

土師器系　土師質の皿、燈明皿、焙烙、火鉢などは18世紀中ごろ以前に位置付けられるＳＫ24・25ではまとまって出土しているが、ＳＫ１・12などといった18世紀後半以降の遺構ではほとんどみられない。例外として、ＳＫ18からは土師質の有孔円盤が数点出土しており、なんらかの儀礼や祭祀に伴う遺構および遺物であることが推測される。

遺物の詳細をみると、ＳＫ24・25から出土する焙烙の口縁部形態には、口縁端部を摘み上げるもの、玉縁状に肥厚させるもの、およびこの中間的な形態が併存している。前者は伊勢地域、後者は関西地域の影響を受けており、いずれも在地で製作されたものと考えられる。また、関西地域から搬入された「泉湊伊織」刻印の焼塩壺もみられ、東西双方向との交流が読み取れる。

京・信楽系　本報告では、伊賀・信楽産の陶器を含めて「京・信楽系」と呼称する。近世に位置付けられるほぼすべての遺構から出土しており、出土量・器種ともに最も豊富である。ＳＫ24・25では椀・瓶類・鉢・甕などが中心だが、ＳＫ１・12ではこれに加えて灯火具・仏具・鍋類が加わり、18世紀後半から19世紀初頭を境に時期的な差異がある。この時期に燈明皿や焙烙からの機能転化が想定できる。

瀬戸・美濃系　陶器についてはＳＫ１・24・25からまとまった出土がみられる。なお、いずれの遺構でも京・信楽系陶器より出土量は大幅に少なく、肥前系陶磁器の出土量を超えることもない。京・信楽系陶器の丸椀や平椀よりも一回り大きい喫茶椀が目立ち、尾呂茶椀などといった特徴的な資料の他、鉢などの大型器種も複数点確認できる。上野城下町遺跡第５次調査（農人町）でも18世紀後半の遺構から瀬戸・美濃系陶器が一定量出土しており[10]、似た様相を示す。

磁器については、前述の３遺構からは出土せず、19世紀以降に位置付けられるＳＫ12や表土・包含層から型紙摺りの染付磁器椀が出土している。18世紀以前は客体的な存在であった瀬戸美濃系陶器だが、19世紀以降は瀬戸美濃系磁器が椀・皿類の大部分を占めるようになる。

肥前系　陶器・磁器ともにＳＫ１・24・25からまとまった出土がみられる。器種構成をみると、ＳＫ24・25では椀・皿・壺・香炉・仏具類がみられるが、ＳＫ１では椀・皿類のみとなっており、京・信楽系陶器の器種多様化に対応すると考えられる。

時期的な評価としては、上記３遺構の出土品は概ね肥前磁器Ⅳ期（1690～1780年）に位置付けられ、今回の調査区からはこの前後の時期の資料はほとんど確認できなかった。19世紀以降は瀬戸・美濃系磁器の流入が開始することで、肥前系磁器の需要が低下したことが考えられるが、17世紀の様相について今回の調査で新たな知見を得ることはできなかった。

個別の遺物をみると、ＳＫ24・25では色絵椀や青

No	種別	墨書内容	種別	器種	報告No.	実測番号	遺構	調査区	時期
1	記号	十？	陶器	椀	33	004－01	SK12	A-C6	19世紀以降
2		と	陶器	椀	192	004－02	SK24	B-E10	18世紀
3		十	陶器	椀	197	004－03	SK24	B-E10	18世紀
4		十？	陶器	椀	198	004－04	SK24	B-E10	18世紀
5		十	陶器	椀	199	004－05	SK24	B-E10	18世紀
6		△	陶器	椀	203	004－06	SK24	B-E10	18世紀
7		〆三	陶器	椀	202	004－07	SK24	B-E10	18世紀
8		十	陶器	椀	196	005－02	SK24	B-E10	18世紀
9		判読不明	陶器	椀	204	005－03	SK24	B-E10	18世紀
10		十？	陶器	瓶類	241	005－04	SK24	B-E10	18世紀
11	文字	汁？料？	陶器	皿	190	005－01	SK24	B-E10	18世紀
12		浅？凍？	土師器	皿	137	005－05	SK24	B-E10	18世紀
13		判読不明	土師器	皿	140	006－01	SK24	B-E10	18世紀
14		判読不明	土師器	皿	139	006－02	SK24	B-E10	18世紀
15		森？	陶器	椀	201	006－04	SK24	B-E10	18世紀
16		弓？	陶器	椀	228	006－05	SK24	B-E10	18世紀
17	文章	弐拾六年□□□	磁器	瓶類	482	006－06	SK25	B-E11	18世紀
18		判読不明	土師器	皿	136	086－02	SK24	B-E10	18世紀
19		判読不明	土師器	皿	138	006－03	SK24	B-E10	18世紀
20		判読不明	陶器	椀	420	006－07	SK25	B-F11	18世紀
21		御次付・次 （「次」は高台内側）	陶器	椀	8	086－04	SK1	A-C5	18世紀後半
22		戊壬二月	陶器	鉢	247	086－01	SK24	B-E10	18世紀
23		五□・・・□八日　文□ 酉□□　時□　宝・・・	土師器	火鉢	148	087－01	SK24	B-E10	18世紀
24		卯□八月　楓	陶器	椀	222	086－03	SK24	T8	18世紀

第14 表 墨書陶磁器一覧表

磁椀、絵皿などが複数点確認でき、香炉などの優品も含まれる。三島手の陶器鉢も出土しており、大型器種の流入が認められることも特筆すべきである。また、破面に漆と思われる付着物が確認できる資料もあり、修繕を重ねながら使用していたことが窺える。

瓦類　近世のいずれの遺構からも一定量の出土がみられ、上級家臣の屋敷として藤堂玄蕃屋敷では瓦葺きが採用されていたことを物語っている。ＳＫ１・24では本瓦葺きの丸瓦・平瓦と桟瓦が混在しており、ＳＫ25では丸瓦・平瓦のみがみられ、時期差を反映している可能性がある。

軒丸瓦については、ほとんどが巴文だが、ＳＫ24からは片喰文の資料が数点みられる。片喰文は藤堂家の替文であり、当地に藤堂玄蕃屋敷があったことを直接的に示す出土遺物である。軒平瓦の中心飾りについては、橘状と剣菱形の２種類がみられた。前者は関西系（河内・和泉）の資料[9]、後者については在地系の可能性がある。同じ藤堂藩の津城下町[10]では東海系（尾張・三河）の唐草文が散見されることから、地域によって異なる瓦の流通網があったことが窺える。

b　近代の遺物

前述のとおり、ＳＫ12や表土・包含層からは19世紀以降の瀬戸美濃系磁器を含む遺物群が確認でき、これらの中には明治時代以降の遺物も含まれる。以下では特筆すべき資料を取り上げる。

ＳＫ12では革靴のソールが複数出土した。腐食のため図化はできなかったが、当遺跡が明治時代以降裁判所として利用されたことを勘案すると、公的機関における勤務者の間で服装の西洋化が進んでいたことが窺える。

また、表土出土遺物には戦時中の統制番号と思われる「品148」の銘がみられる磁器椀があった。これは愛知県瀬戸市品野で生産されたものであると考えられ[10]、戦時中の瀬戸・美濃系磁器の流通を知る上で重要な資料である。（樋口）

3　墨書陶磁器の検討

a　墨書陶磁器の概要（第13表）

本遺跡における墨書陶磁器の総数は24点で、画数が2画以上、もしくは筆遣いのわかるものを図化・掲載した。文字の観察は肉眼観察を基本とし、状態に応じて赤外線カメラによる確認を併用した。

b　墨書陶磁器の構成

墨書陶磁器24点のうちＳＫ24出土品が20点、ＳＫ25出土品が２点、ＳＫ１出土品が１点、ＳＫ12出土品が１点である。このうち、土師器は６点、陶器は17点、磁器は１点であり、墨書のほとんどは陶器に書かれている。陶器は記号が記されたものが多い一方で、土師器の墨書の多くは文字ないしは文章であり、墨書内容の傾向にやや差異がみられる。より消費されるペースが速い土師器の方に内容の濃い墨書が書かれていることは興味深い。

c　文字の検討

記載内容　判読できる文字には、平仮名・漢字・記号様のものなどさまざまである。その一つ一つがどのような意味をもっているのかについて、以下で考察をおこなった。

「浅○」「森」など

主に高台内に記載されていることが多く、これらは人名の一部を表す可能性がある。

「〆」「〆三」「十」「料」「△」など

これらは陶器椀の高台内に記載されているものが多い。数や種類、用途の管理などに用いられているものではないかと思われる。

「八日」「弐拾六年」など

日付や年代がわかる表記である。器の使い始めや内容物の保存日時など、さまざまな意図が考えられる。

年代の推定　247は欠けている部分があるものの、「戊壬二月　（いぬうるうにがつ）」の墨書が確認できる。閏月は、太陰太陽暦を用いていた江戸時代において、約３年に１度暦の上で挿入された月のことである。江戸時代が始まったとみられる慶長８年（1603年）から、太陽暦に移行する明治5年（1872年）までの間では、96回の閏月があったことがわかっている[11]。また、閏月はその挿入される年ごとで異なり、「閏二月」の場合もあれば、「閏九月」といった場合も存在する。このことから、「戊年」と「閏二月」の２つが重なる年を調べると、宝暦４年（1754年）であることがわかる。また、同じＳＫ24で見つかった148の高台部分の墨書からは、「宝（たから）（ほう）」の字も確認されている。これも「宝暦」を構成する可能性があり、247と整合的に理解が可能である。

用途が推定できる陶器　Ａ区北部のＳＫ１からは「御次付」と墨書がされた８が出土している。「御次」は跡継ぎ・世継ぎの若殿様と考えることができ、「付」でそのお世話をする「お付きの者」と考えられる。これらのことからこの墨書は、器の使い手を名前書きしたものではないかと思われる。

なお、出土したＳＫ１は先述の通り池の遺構とみられ、出土した肥前系磁器の文様構成などから18世紀後半から19世紀初頭に位置づけられる。これを踏まえると、この「御次」とされる人物は、藤堂玄蕃家九代良演の長男である後の十代良永ではないかと考えられる。（佐藤）

4　調査成果と今後の課題

今回の調査成果と今後の課題は以下のようにまとめられる。

①ＳＫ１、ＳＸ８・９、ＳＥ16など、藤堂玄蕃屋敷の庭園に伴うと思われる遺構を検出し、上級家臣の屋敷における庭園のあり方の一端が明らかとなった。

なお、屋敷本体に関連する遺構は確認できず、屋敷地内における庭園の配置等は不明である。当時の

絵図から読み取れる限りは、大通りに面する南側に屋敷本体があり、その北側に庭園があったと考えると、今回の調査結果とも整合的に理解できる[12]。新たな文献資料および絵図の発見、ならびに今後の発掘調査成果の進展に期待したい。

②ＳＫ24からは、暦年代（1754年）が推定できる墨書陶磁器とともに、まとまった量の陶磁器および瓦類が出土した。出土した肥前系磁器や瀬戸・美濃系陶器も18世紀中葉前後に位置付けられ、伊賀地域における近世陶磁器の組成や流通を考える上、暦年代が判明する資料群として重要である。

ＳＫ24および同時期に位置づけられるＳＫ25の組成をみると、在地産と思われる土師器の皿・焙烙・火鉢に加え、近隣地域で生産された京・信楽系陶器が最も多く出土した。一方で、瀬戸・美濃系陶器や肥前系磁器もみられ、東西両方向からの陶磁器の流通網が存在したことが読み取れる。なお、焙烙の口縁部形状や軒平瓦の瓦当文様構成、焼塩壺の存在などから、関西地域の影響が強くみられ、対して瀬戸・美濃系陶器の出土量が相対的に少ない。近年三重県内で発掘調査が進んでいる松坂城下町遺跡[13]では18世紀後半から19世紀初頭の段階でも京・信楽系よりも瀬戸・美濃系の製品が多く、今回の調査とは様相が大きく異なる。久居城下町遺跡[14]や津城下町遺跡[15]でも松坂城下町と似た傾向がみられ、軒平瓦についても上野城では関西系の唐草文が出土するのに対し、前述の３遺跡では東海系の唐草文が散見される。隣接する地域でありながら、伊賀盆地と伊勢湾西岸地域では陶磁器や瓦類の流通網が異なっている可能性が今回の調査から示せた。

なお、今回の調査ではこの前後の時期の資料は僅かであり、近世陶磁器の時期的変遷を追うことはできなかった。また、本来であれば、上野城下町遺跡も含めた上で、過去の調査成果と併せて陶磁器組成の定量的な検討が望まれるが、整理期間の制約および筆者の力不足によりかなわなかった。今後の検討課題としたい。（樋口）

【註】

(1) 上野城の屋敷地の変遷については、上野城第13次発掘調査報告にて詳説されているので参照されたい（三重県埋蔵文化財センター『上野城第13次発掘調査報告』 2014年）。なお、絵図の原典については、福井健二『絵図からみた上野城』（伊賀文化産業協会 2010）において平野健一氏所蔵のものを引用した。

(2) 福井健二『上野城城郭図集』日本古城友の会 1974年。

(3) 伊賀秘蔵写真帖刊行会『伊賀秘蔵写真帖』2004年。

(4) 註２と同じ。

(5) 福井健二『定本・三重県の城』郷土出版社 1991年。

(6) 滋賀県立大学前教授濱崎一志氏よりご指摘を受けた。

(7) 三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡（第５次）発掘調査報告』2014年。

(8) 金子智「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」『古代』第101号 早稲田大学考古学会 1996年。

(9) 津市教育委員会『津城下町遺跡調査報告』2015年。

(10) 萩谷茂行「統制経済化における陶磁器製品製造、流通の一考察～いわゆる「統制番号」に関する検証～」『瑞浪市歴史資料集』第２集 瑞浪陶磁資料館 2013年。

(11) 閏月の抽出にあたっては、「Cyber Librarian 図書館員のコンピュータ基礎講座」内の「西暦・和暦対照表」に拠った。

(12) 伊勢参宮街道沿いの島貫宿を調査した雲出島貫遺跡では、道路側の建物に対し、奥側にゴミ捨て穴を中心とした土坑群が確認されている（三重県埋蔵文化財センター『嶋抜Ⅱ』 2000年）。今回の調査で検出したＳＫ24・25もこのような性格の遺構であると考えられ、屋敷地内の位置関係とも符合する。

(13) 三重県埋蔵文化財センター『松坂城下町遺跡（第１～９次）発掘調査報告』2021年。

(14) 三重県埋蔵文化財センター『久居城下町遺跡・東鷹跡古墳』2008年。

(15) 註７と同じ

A区全景（東から）

A区北壁土層（南から）

A区西壁土層（下層確認トレンチ・東から）

写真図版2

B区全景（西から）

B区東壁土層（西から）

B区北壁土層（下層確認トレンチ・南から）

ＳＫ１（北西から）

ＳＫ１（南西から）

ＳＫ１　遺物出土状況（西から）

ＳＫ１　埋甕出土状況（南から）

ＳＫ12（南東から）

ＳＫ12 北半土層断面（東から）

ＳＫ12 木杭出土状況（北から）

ＳＫ12 遺物出土状況（東から）

ＳＫ18 土層断面（西から）

ＳＫ19 土層断面（西から）

ＳＫ18 完掘状況（西から）

ＳＫ19 完掘状況（西から）

ＳＫ23（北から）

ＳＫ16（西から）

ＳＫ24 土層断面（東から）

ＳＫ25（左）・ＳＫ27（右）土層断面（北から）

ＳＺ８（南西から）

ＳＺ８（東から）

ＳＺ９（西から）

ＳＺ10（Ａ区側・南東から）

ＳＺ10 土層断面（Ａ区側・西から）

ＳＺ10（Ｂ区側・東から）

ＳＺ10 作業風景（Ｂ区側・西から）

2

3

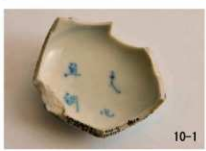
4

5

6

7

8–1


10–1

10–2

8–2

9

11

28

出土遺物１

12

13

14

15

16-1

16-2

17

19

26

27

33

41

出土遺物２

29

30

36

37

40

42

43

46

48

49

50

51

52

53

54

55

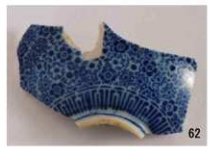
56

57

出土遺物３

58

61


62

63

64

65

66

67

68

70

71

72

73

75

76

78

79

81

82

83

89

90

93

94

97

100

101

105

111

114

116

118

131

132

119

127

出土遺物５

136

137

138

145

144

146

149

150

151

153

154

155

156

148-1

148-2

148-3

157

158

161

163

164

165

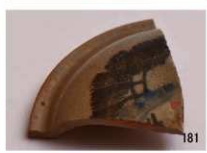
170

172

175

176

180


181

184

186

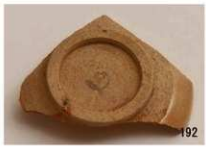
188

189

190-1

190-2

191


192

171

196

197

198

199

200

201

202

203

205

206

207

209

216

219

221

出土遺物９

222

223

228

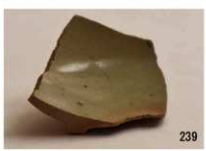
229

230

233

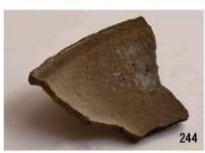
234

236


239

241

242


244

245

246

247

248

252

257

258

259

260

261

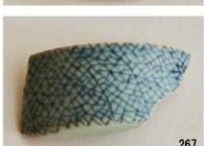
262

263

264

265

266


267

268

269

270

271

272

274

275

276

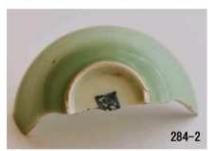
277

279-1

279-2

280

284-1


284-2

281

282

283

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

297

298

299

300

301-1

303-1

303-2

301-2

313-1

316-1

302

313-2

316-2

306

307

308

309

311-1

311-2

310

314

315

317-1

318-1

319-1

317-2

318-2

319-2

320-1

320-2

322

326

327

328

331

332

336

339

342

343

344

345

346

347

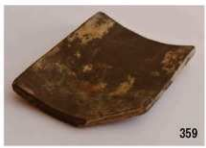
348

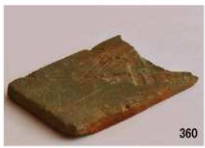
349

353

354

355


359


360

361

362

363

364

365

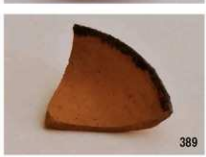
371

374

386

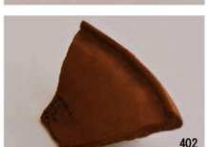
387

388

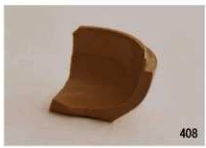

389

391

392


402

405


408

409

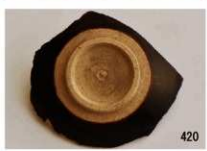
410

411

417

418

419


420

421

422

423

424

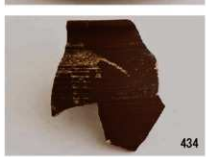
426

427

428

431

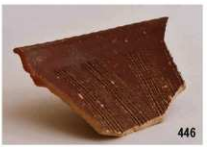
433


434

435

438

441


446

432

453

456

457

458

460

463-1

463-2

464

465

466

467

469-1

469-2

468

470

471

472

473

474

475

476

477

478

479

480

481-1

481-2

483

487

482

485

486

491

492

493

496

497

406

501

502

503

504

505

511

514-1

514-2

515

出土遺物20

518

521-1

521-2

524-1

524-2

531

534

535

537

536

538

539

540

報告書抄録

ふりがな	うえのじょうあと（だい15じ）はっくつちょうさほうこく
書名	上野城跡（第15次）発掘調査報告
副書名	藤堂玄蕃屋敷跡
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	４１４
編著者名	樋口太地、佐藤嘉晃
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）1732
発行年月日	2023（令和５）年３月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
うえのじょうあと 上野城跡	いがしちうえのまちのうち 伊賀市上野丸之内	216	a358	34度 44分 39秒	136度 15分 46秒	20211011 ～ 20220207	873㎡	裁判所庁舎 建築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野城跡	城館跡	近世～近代	土坑・溝・井戸 石列・ピット	陶磁器・土師器 瓦・銭貨・石製品 銅製品・土製品	

要約

上野城跡は伊賀市上野の中心部にひろがる近世城郭である。上野城の絵図と現地形の照合により、調査地の津地方裁判所伊賀支部庁舎は、上級家臣の藤堂玄蕃屋敷に位置することがわかる。藤堂玄蕃屋敷地は、江戸時代前期から後期にかけて確認できる。

令和３年度津地家裁伊賀支部建築工事に際して、旧庁舎の駐車場の範囲において発掘調査を実施した。その結果、江戸時代（18世紀）の庭園に伴うと考えられる池や井戸の遺構や、大型廃棄土坑が確認され、多量の陶磁器等が出土した。これらの遺構は藤堂玄蕃屋敷に関連する可能性がある。

三重県埋蔵文化財調査報告４１４

上野城跡（第15次）発掘調査報告
（藤堂玄蕃屋敷跡）
― 伊賀市上野丸之内 ―

2023（令和5）年３月10日

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　共立印刷株式会社